埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第114集

比企郡小川町

大杉・岡原・蟹山

県道本田小川線関係埋蔵文化財発掘調査報告

1991

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

秩父山系の山ふところに抱かれた比企郡小川町は、正倉院文書に「武蔵紙」と記された伝統ある和紙の産地として有名です。また、静かなたたずまいを見せる市街地や周辺には、国指定重要文化財石造法華経供養塔や県指定史跡穴八幡古墳など、目に触れることができ歴史的にも興味深い文化財や史跡、そして土中深く眠り続けている埋蔵文化財が数多く存在することでもよく知られています。

本書で報告する大杉・岡原・蟹山の三遺跡は、この市街地北方の能増・伊勢根地区に所在しています。両地区の地形は、樹枝状に発達した丘陵と台地、市野川とその支流が形成した沖積低地で構成されています。丘陵上には、高見城や高谷砦などの中世城館跡、丘陵から続く台地上には蟹山遺跡を初めとする縄文時代の遺跡群、沖積低地を望む台地上には広く古墳群が分布しています。また、市野川の谷筋は、鎌倉と北関東地方を結ぶ鎌倉街道といわれており、大杉遺跡の調査区付近には、保存状態の良い「切り通し」が残されています。

このたび、このように歴史的に由緒深いこの地区を走る県道本田小川線の道路改良工事が計画されました。工事予定地に所在する埋蔵文化財に関する取り扱いにつきましては、関係各機関の慎重な協議が重ねられた結果、当事業団が発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査の結果、中世の所産と考えられる土壙、建物あるいは杭跡と推定される柱穴群などの遺構と縄文時代中期の土器、奈良から平安時代にかけての土師器・須恵器、中世のかわらけなど貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものでありますが、埋蔵文化財の保護に関する教育・普及さらに学術研究の資料としてご活用いただければ幸いです。

刊行に当たりまして、発掘調査に関する諸調整にご尽力していただきました埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまでご協力くださいました埼玉県土木部道路建設課、東松山土木事務所、さらに小川町教育委員会および関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成３年11月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　荒　井　修　二

例　　言

1　本書は、埼玉県比企郡小川町大字能増398番地他に所在する大杉・岡原・蟹山遺跡の発掘調査報告書である。

文化庁指示通知は平成３年６月７日付委保第５の567号である。

遺跡名の略号は大杉遺跡・ＯＳＧ、岡原遺跡・ＯＫＨＲ、蟹山遺跡・ＫＮＹＭである。

2　発掘調査は県道本田小川線の建設事業に伴うものであり、埼玉県教育局指導部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3　発掘調査は石塚和則・吉田稔が担当し、平成２年４月１日から平成２年９月30日まで実施した。整理作業は今井宏が担当し、平成３年10月１日から平成３年11月30日まで実施した。

なお、発掘調査・整理作業の組織は２ページに示した。

4　本書の執筆は第Ⅰ章第１節を県文化財保護課が、他を今井宏が行なった。

5　図版作成、写真撮影は下記の者が行なった。

図版作成　　今井　宏

発掘調査撮影　石塚和則・吉田　稔

遺物撮影　　今井　宏

6　本書の編集は、資料部資料整理第１課の今井宏が行なった。

7　本書にかかる資料は、平成４年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

8　本書内の挿図における指示は次のとおりである。

- Ｘ・Ｙによる座標表示は、国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を表わし、方位はすべて座標北を示す。
- 挿図類の縮尺は次の率を基本とし、それ以外のものは個別に示した。

遺　構	土壙	溝	井戸	柱穴	1/60
遺　物	土器	土製品	石器		1/3

- 土器の断面は、土師器は白抜き、須恵器は塗りつぶして表現している。

9　本書の作成に当たり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。（敬称略）

高橋好信　保田義治

目　　次

序

例言

Ⅰ　調査の概要 …… 1
　1．発掘調査に至るまでの経過 …… 1
　2．発掘調査と報告書刊行事業の組織 …… 2
　3．調査の経過と方法 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 6
Ⅲ　大杉遺跡の調査 …… 9
　1．遺跡の概観 …… 9
　2．遺構と遺物 …… 11
　　A区 …… 11
　　B区 …… 13
　　C区 …… 24
　　D区 …… 25
　　E区 …… 26
　　F区 …… 27
Ⅳ　岡原遺跡の調査 …… 31
　1．遺跡の概観 …… 31
　2．遺構と遺物 …… 33
Ⅴ　蟹山遺跡の調査 …… 35
　1．遺跡の概観 …… 35
　2．遺構と遺物 …… 35
Ⅵ　まとめ …… 39

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 4
第２図　Grid 展開網図 …… 5
第３図　周辺の遺跡 …… 7
第４図　台ノ前遺跡出土土器 …… 8
第５図　大杉遺跡全体図 …… 9
第６図　大杉遺跡基本層序 ……10
第７図　大杉遺跡Ａ区出土遺物 ……11
第８図　大杉遺跡Ｂ区全体図 ……12
第９図　大杉遺跡Ｂ区土壙（１）……14
第10図　大杉遺跡Ｂ区土壙（２）……15
第11図　大杉遺跡Ｂ区第２号溝･AM8Grid 柱穴群 …17
第12図　大杉遺跡Ｂ区第１号溝･AL9Grid 柱穴群 …18
第13図　大杉遺跡Ｂ区 AK9Grid 柱穴群 ……19
第14図　大杉遺跡Ｂ区第１・２号溝・柱穴群 ……20
第15図　大杉遺跡Ｂ区柱穴群出土遺物 ……21
第16図　大杉遺跡Ｂ区出土遺物 ……22
第17図　大杉遺跡Ｃ区出土遺物 ……24
第18図　大杉遺跡Ｄ区出土遺物 ……25
第19図　大杉遺跡Ｅ区出土遺物 ……25
第20図　大杉遺跡Ｆ区全体図 ……27
第21図　大杉遺跡Ｆ区土壙 ……28
第22図　大杉遺跡Ｆ区柱穴群 ……29
第23図　大杉遺跡Ｆ区出土遺物 ……30
第24図　岡原遺跡基本層序 ……31
第25図　岡原遺跡全体図 ……32
第26図　岡原遺跡井戸跡 ……33
第27図　岡原遺跡出土遺物（１）……33
第28図　岡原遺跡出土遺物（２）……34
第29図　蟹山遺跡全体図 ……36
第30図　蟹山遺跡Ｆ区全体図 ……37
第31図　蟹山遺跡Ｆ区出土遺物 ……38

写真図版目次

図版１　大杉遺跡近景
　　大杉遺跡Ｂ区全景
図版２　大杉遺跡Ｂ区完掘状態
　　大杉遺跡ＳＫ１・２・４・５
図版３　大杉遺跡ＳＫ６・７・10・12
　　大杉遺跡ＳＫ13・14・15・17
図版４　大杉遺跡Ｆ区全景
　　大杉遺跡Ｆ区全景
図版５　大杉遺跡Ｂ区出土遺物
　　大杉遺跡Ｆ区出土遺物
図版６　岡原遺跡遠景
　　岡原遺跡Ａ区全景
図版７　岡原遺跡Ｂ区完掘状態
　　岡原遺跡出土遺物
図版８　蟹山遺跡遠景
　　蟹山遺跡近景
図版９　蟹山遺跡Ｆ区全景
　　蟹山遺跡Ｆ区出土遺物

Ⅰ　調査の概要

1　調査に至るまでの経過

埼玉県では、増大する交通量に対処するため、各種の道路建設工事が進められており、県道本田小川線の建設工事は、埼玉県西南部の交通量の増大と地域交通網の整備を図る目的をもって、埼玉県土木部によって計画された。こうした開発事業に対応するために、県教育局指導部文化財保護課では、開発関係部局と各種の事前協議を行ない、文化財保護と開発事業との円滑な調整を進めているところである。

平成２年１月11日付け道建第789号で、道路建設課長から文化財保護課長あて「改良事業地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて」照会があった。

これに対し文化財保護課では、現地調査を実施し、その結果に基づき平成２年２月20日付け教文第1328－2号により次のとおり回答した。

1　埋蔵文化財の所在

名　　称	種　別	時　　代	所　在　地
蟹　山　遺　跡 （35－028）	集 落 跡	縄文・平安時代	小川町高谷字蟹山
岡　原　遺　跡 （35－064）	集 落 跡	平　安　時　代	小川町能増字岡原
大　杉　遺　跡 （35－067）	集 落 跡	平　安　時　代	小川町能増字大杉

2　取扱い

上記埋蔵文化財は現状保存することが望ましい。計画上やむを得ず現状変更する場合には、文化財保護法第57条の３の規定により、事前に文化庁長官へ埋蔵文化財発掘通知を提出し、記録保存のため発掘調査を実施すること。

なお、発掘調査を実施する場合は当課と協議すること。

この確認調査の成果に基づいて、道路建設課と文化財保護課は上記埋蔵文化財包蔵地の保存策について協議を重ねたが、道路網の整備を目的とした建設計画でもあり、計画の変更は不可能と判断されたため、やむをえず記録保存の処置を講ずることになった。

発掘調査の実施については、道路建設課、文化財保護課並びに財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者で事前協議を行ない、協議が整ったため、その旨を文化財保護課から平成２年３月１日

付け教文第1531号により道路建設課長並びに財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長あて通知し、これにより両者は、発掘調査にかかわる委託契約を締結した。

発掘調査の実施に先立って、埼玉県知事から文化財保護法第57条の３第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から同法第57条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査届けが提出され、発掘調査は平成３年４月から開始された。

なお、発掘調査に対する文化庁長官からの支持通知番号は、平成３年６月７日委保第５の567号である。

（文化財保護課）

2　発掘調査と報告書刊行事業の組織

a．発掘調査（平成２年度）

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事兼管理部長	古市芳之
庶務経理	
庶務課長	高田弘義
主査	松本晋
主事	長滝美智子
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	本庄朗人
主事	斉藤勝秀
主事	菊池久
発掘	
理事兼調査研究部長	吉川国男
調査研究副部長	塩野博
調査研究第３課長	宮崎朝男
主任調査員	石塚和則
調査員	吉田稔

b．報告書作成事業（平成３年度）

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事兼管理部長	倉持悦夫
庶務経理	
庶務課長	高田弘義
主査	松本晋
主事	長滝美智子
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	福田昭美
主事	越塚雄二
主事	菊池久
整理	
資料部長	中島利治
資料部副部長兼資料整理第１課長	増田逸朗
主任調査員	今井宏

3　調査の経過と方法

1　発掘調査

大杉・岡原・蟹山遺跡の発掘調査は、県道本田小川線の道路改良事業に伴い平成２年４月１日より同年９月30日までの６か月間にわたり、三遺跡で5,000㎡を調査対象として実施された。

発掘調査は、現道の拡幅部分が対象であるため、調査区の幅が狭く、かつ交通量が多いため、重機を使用した表土掘削作業は安全面上困難であった。そのため表土除去作業は、すべて人力で行なった。調査にあたっては、ガードフェンスを設置して、作業の安全性に留意して進めた。

４月～５月上旬、調査区確認、プレハブ設置、補助員募集など調査の諸準備を行なった。５月中旬、現地で東松山土木事務所担当者と調査工程の打ち合わせを行ない、下旬より岡原・蟹山・大杉遺跡の順に調査を実施することになった。

６月中旬、遺構実測および写真撮影を行ない、岡原遺跡の調査を終了する。続いて蟹山遺跡の表土掘削作業、遺構確認、精査を行ない、７月中旬に終了した。

７月下旬、大杉遺跡の調査を開始する。Ｂ区、Ｆ区で土壙・溝・柱穴群が検出されたので、Ｂ区より順次調査を進める。遺構精査終了後、随時遺構実測・写真撮影を行ない、Ｆ区の調査に入る。

８月下旬、航空写真・航空測量の準備のため、調査区の清掃を行ない末日実施した。その後、順次三遺跡の埋め戻しを行ない、28日に器材の撤収を行なった。

なお、調査グリッドの設定は、調査区全体を国家標準直角座標Ⅸ系に基づき、原点を大杉遺跡北西隅のＸ＝9,560、Ｙ＝－49,620に置き、南および東に数値を増す10ｍ方眼を基準とした。

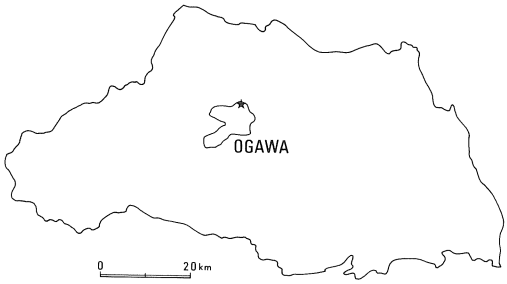
グリッドの呼称は、西から東へＡ～ＡＷのアルファベット、北から南へ１～116の数字で表示することとした。主な基準杭の座標値は、大杉遺跡ＡＭ８杭でＸ＝9,550・Ｙ＝－49,630、岡原遺跡ＡＡ39杭でＸ＝9,250・Ｙ＝－49,710、蟹山遺跡Ｌ 104杭でＸ＝8,580・Ｙ＝－49,730である。

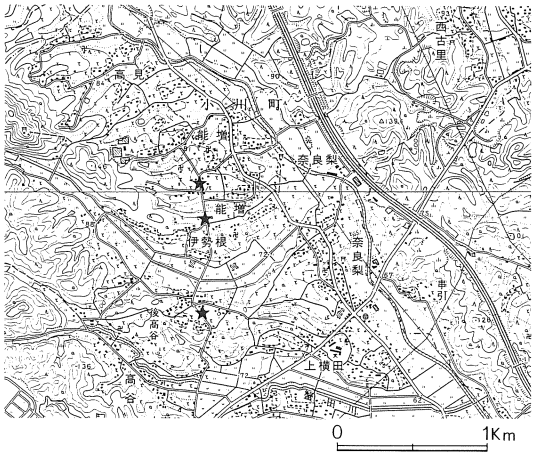
2　整理作業

報告書作成作業は、平成３年10月１日から平成３年11月30日まで実施した。

10月上～中旬、遺物の注記および接合・復元、並行して図面整理を行なう。図面整理終了後、遺構図面のトレースを開始する。下旬、復元を終了した遺物から実測を始め、実測の終了したものから随時トレースを行なう。

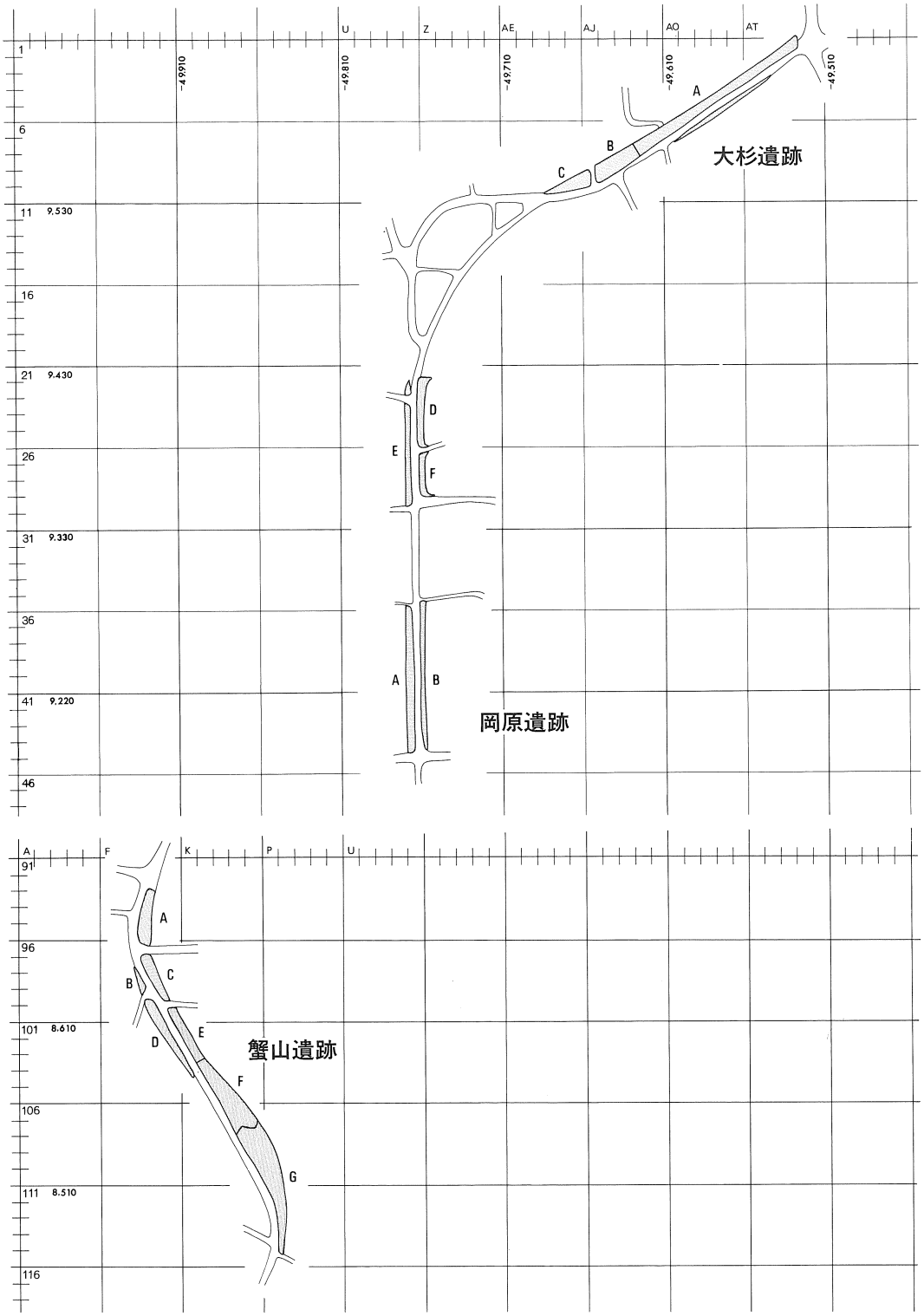
11月上旬、遺構・遺物トレース終了、版下作成を開始する。同時に遺構写真選択・遺物写真撮影を行なう。中旬、報告書の割り付けを行ない、原稿執筆を始める。下旬、原稿執筆および編集を終了し、報告書を刊行する。


OGAWA
0
20km


西古里
小川町
能瀬
奈良梨
能瀬
伊勢根
奈良梨
後高谷
高谷
上横田
0
1Km

大杉遺跡
岡原遺跡
蟹山遺跡
0
250m

第１図　遺跡の位置



第2図　Grid 展開網図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

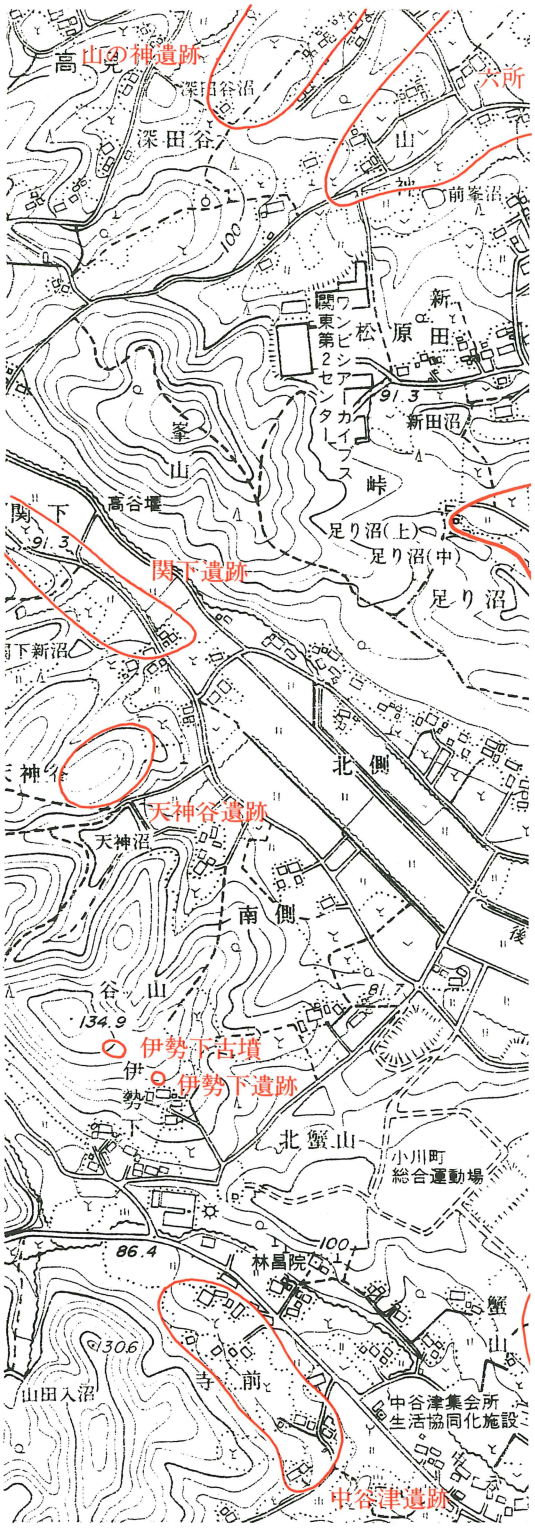
大杉・岡原・蟹山の三遺跡は、JR八高線小川町駅から北へ3.5km、比企郡嵐山町と大里郡寄居町との境界に接する比企郡小川町大字能増・伊勢根に位置している。

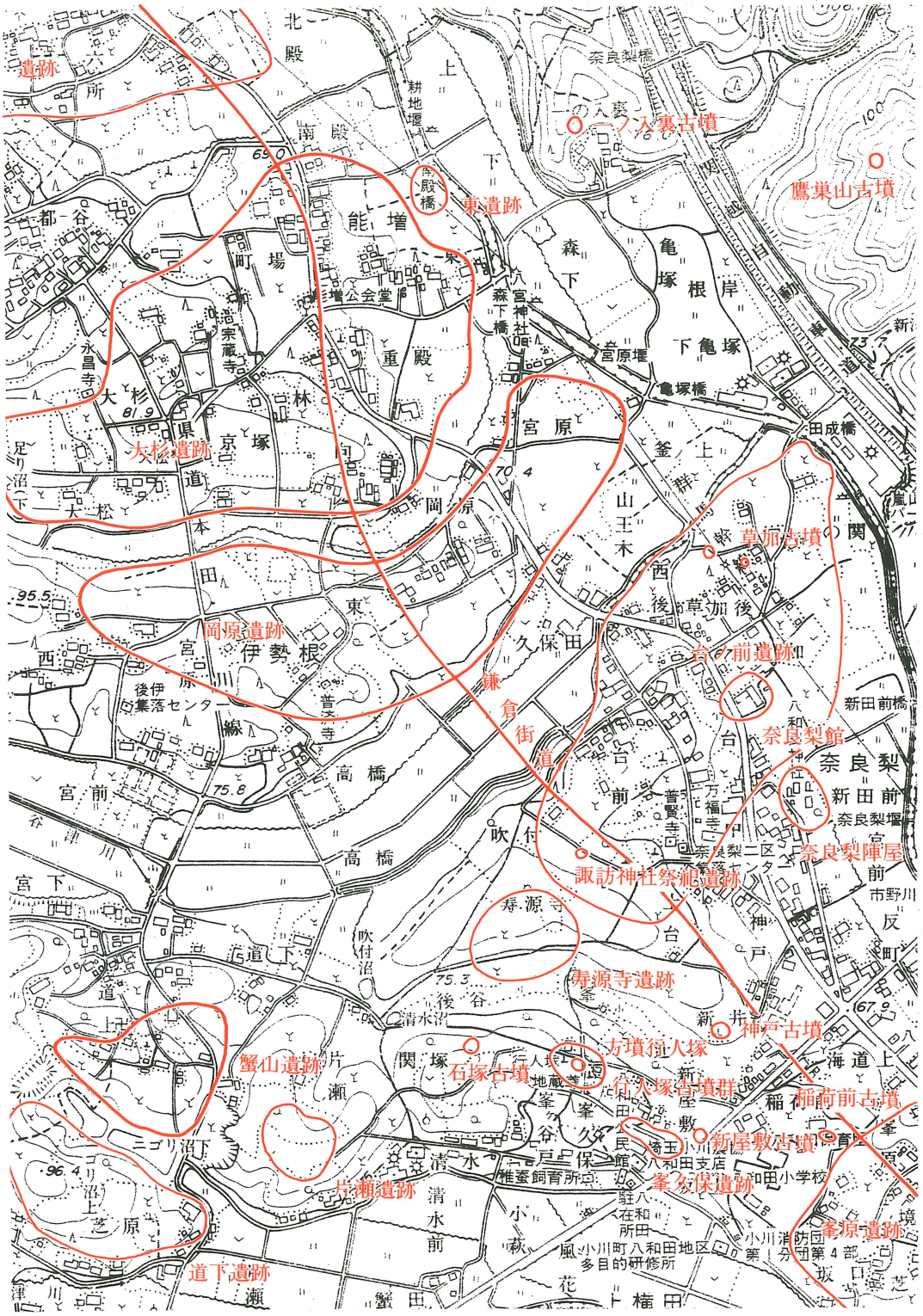
この地域は、比企丘陵の北西端にあたり、地形的には、地元で頂きが４つあることから四津山と呼ぶ標高200ｍの丘陵を最高峰とするなだらかな丘陵群とその裾野に広がる台地、市野川と後谷津川などの支流群が形成した沖積地で構成されている。丘陵・台地とも総じて北西から南東へ緩く傾斜している。

三遺跡が所在する市野川流域は、小川町域でも数多くの遺跡が確認されている地域である。概観すると、丘陵上には『武蔵志』に「古城アリ　四山ト言ウ」と記載された高見城をはじめとする中世の城館跡、台地上には縄文・平安時代を中心とする遺跡群、沖積地を臨む台地上には、行人塚古墳群などの古墳群が広く分布している。また、市野川の谷筋は、北関東と鎌倉を結ぶ鎌倉街道上道伝承地に比定されており、大杉遺跡の今回の調査区に近接した地点にも保存状態が良い「切り通し」が残されている。

旧石器時代の遺跡は、市野川流域の比企丘陵上ではまだ確認されていないが、約２km北方の江南台地上では、スクレイパーを中心とし、全国的に見ても検出例が少ない石器群が出土した寄居町稲荷窪遺跡、掻器・ナイフ形石器・剝片など埼玉県北部域で最大量の450点余りの石器群が検出された牛無具利遺跡が調査され、両者の石器群のあり方や出土状態など種々の問題が提起されている。

縄文時代早期の遺跡としては、日丸の一遺跡が知られているが、内容は明確でない。西稲岡




遺跡
一つ入裏古墳
鷹巣山古墳
東遺跡
大杉遺跡
岡原遺跡
草加古墳
古屋前遺跡
奈良梨館
奈良梨陣屋
諏訪神社祭祀遺跡
寿源寺遺跡
神戸古墳
方墳行人塚
行人塚古墳群
稲荷前古墳
新屋敷古墳
峯ケ保遺跡
峯原遺跡
蟹山遺跡
石塚古墳
片瀬遺跡
道下遺跡
鎌倉街道
奈良梨橋
亀塚橋
田成橋
新田前橋
高橋
吹付
清水
関塚
稲荷
海道上
新屋敷
小川消防団第4部
小川町八和田地区多目的研修所
八和田支店
八和田小学校
埼玉県蚕種飼育所
駐在所
八和田
小川町

第３図　周辺の遺跡

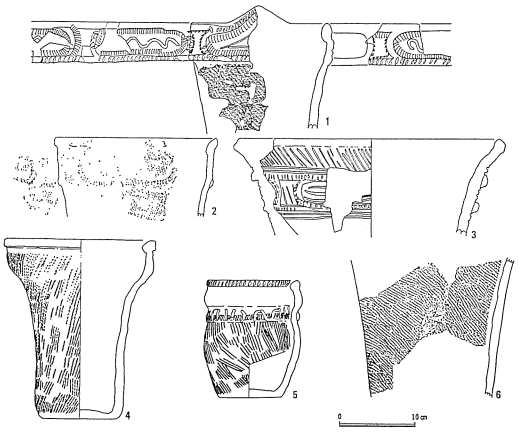
をはじめとする前期の遺跡数は、格段に増大し、その規模も拡大している。遺跡の立地には、共通性が見られ、市野川を望む丘陵や台地上に占地している。これらの遺跡には、現在まだ調査の手が加えられていないが、市街地を東流する槻川流域の平松台遺跡では調査が実施されている。関山期５軒、黒浜期14軒、諸磯ｂ期１軒が検出され、前期の山地性集落遺跡として知られている。

勝坂期から加曽利Ｅ期に限定されるが、中期後半になると遺跡数は更に増大し、山の神・関下・天神谷・中谷津・片瀬・寿源寺遺跡（第３図参照）などが挙げられる。いずれの遺跡も前期と同様に丘陵上や台地上に占地しているが、台ノ前遺跡の様に沖積面との比高差が５ｍほどの低位の台地に進出しているものもあり、立地の多様化が見られる。前述の台ノ前遺跡では、耕作中に勝坂期終末の土器が出土し詳細な論稿が提示されている。

縄文時代後・晩期の遺跡は、遺跡数が激減する埼玉県下の一般的傾向に比例して、蟹田川を挟み蟹山遺跡と対峙する中井遺跡だけである。

弥生時代の遺跡は、後期吉ヶ谷期の宮脇遺跡が確認されているが、詳細は不明である。

古墳時代の集落遺跡は、峯原（第３図参照）・越祢をはじめ５遺跡あるが、いずれも市野川に近接した低位の台地上に立地している。古墳群としては、新田・行人塚・草加古墳群が分布している。県指定史跡方墳行人塚を含む行人塚古墳群９基、新田・草加古墳群は、１～４基と個々の墳丘規模も小さい円墳で構成された小規模な後期の群集墳である。



第４図　台ノ前遺跡出土土器

奈良・平安時代の遺跡は、台地上の大杉・岡原・道下遺跡、市野川などの河岸段丘上の六所・峯原遺跡と立地も多様化している。

現在の県道菅谷・寄居線の南側を並行して走る鎌倉街道上道沿いには、長享二年（1488）山内・扇谷両上杉氏の二度にわたる合戦が行なわれた高見の原を眼下に見る丘陵上の高見城や高谷砦など中世の典型的な山城が残されている。

鎌倉街道上道伝承地

引用参考文献

埼玉県教育委員会　1988『埼玉の中世城館跡』

埼玉県立歴史資料館　1984『研究紀要　第６号』

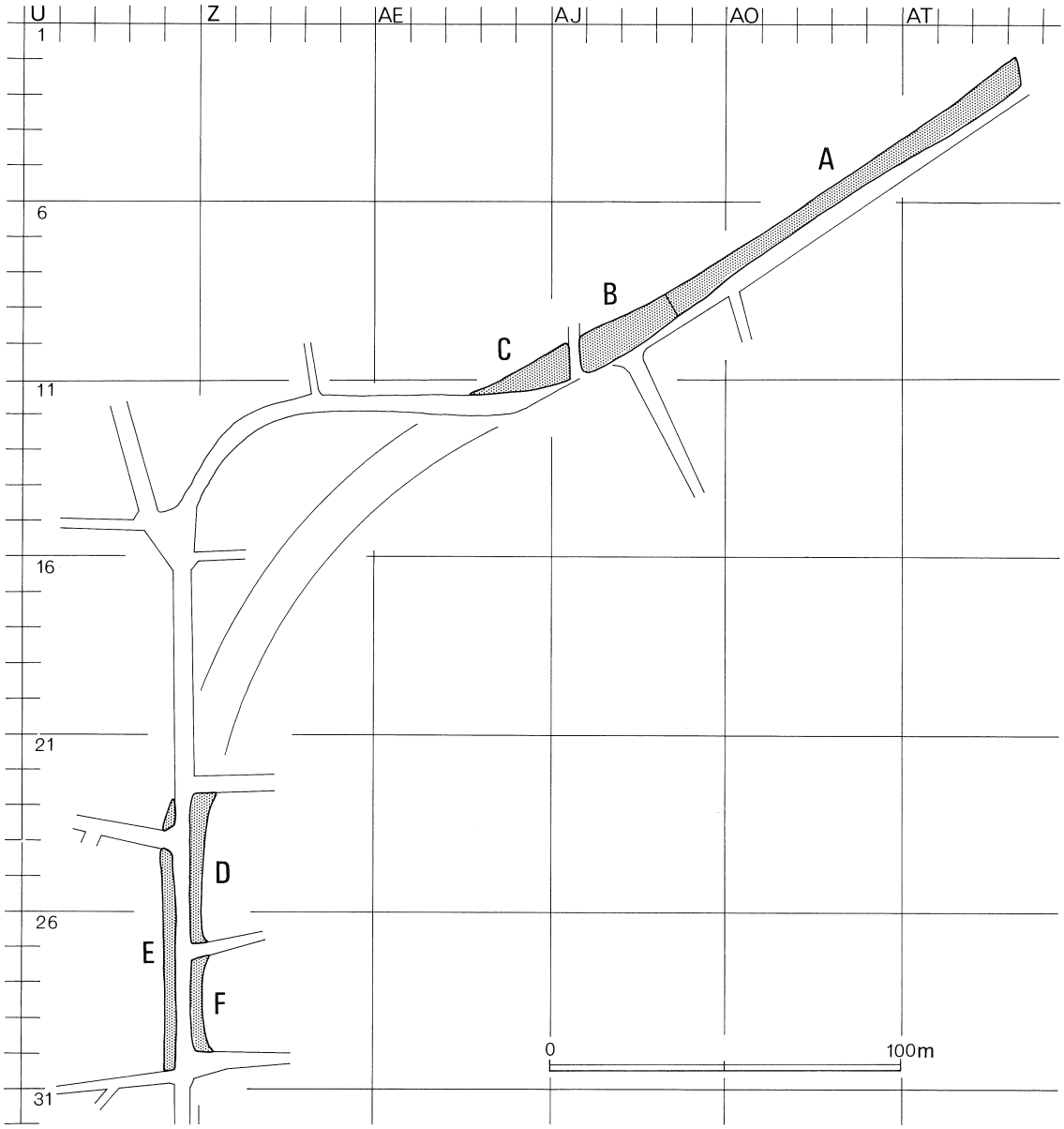
小川町遺跡調査会　1987『広見西遺跡発掘調査報告書』小川町遺跡調査報告第１集

寄居町教育委員会　1984『寄居町史　原始古代中世資料編』

Ⅲ　大杉遺跡の調査

1　遺跡の外観

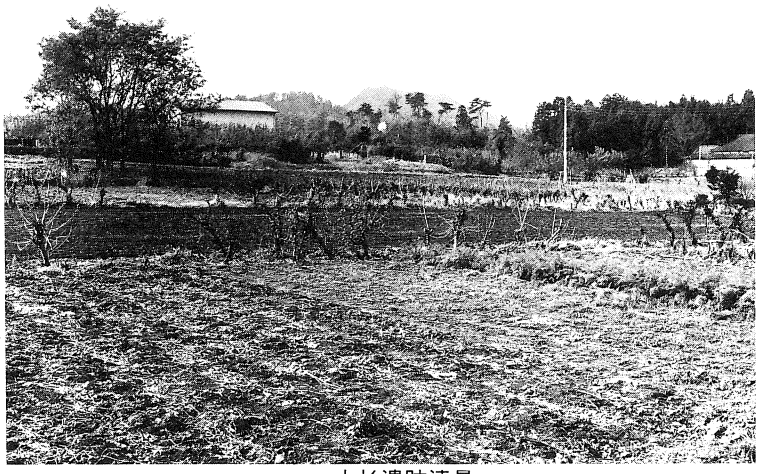
大杉遺跡は、報告する三遺跡で最北に位置している。北西から南東へ流下する市野川右岸の峯山から派生し、南北を小さな開析谷で画され、市野川へ向かって緩く傾斜する標高80～70mの台地上



第５図　大杉遺跡全体図

に立地している。遺跡の広がりは、およそ東西800m、南北550mと広範囲で、南殿・重殿・林・向・京塚・大杉・大松の七つの小字を包括している。

遺跡内には、県道菅谷寄居線と本田小川線の二本の主要地方道が縦横に走り、道沿いに人家が点在し、畑や桑畑が広がる農村風景を形作っている。



大杉遺跡遠景

調査は、本田小川線の拡幅部を対象としたため、県道菅谷寄居線の交差点側から人家の入り口や合流する町道などを境に調査区を便宜的にA～F区（第5図）に分割して実施した。

各調査区で検出された遺構は、調査区の幅も狭く、また現道や耕作などの攪乱が随所に見られ、B区で土壙・溝・柱穴群、F区で土壙・柱穴群であった。A・C・D・E区では、遺構を確認することができなかった。

遺物は、遺構が検出できなかった調査区からも出土しており、縄文時代の打製石斧、奈良～平安時代にかけての土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、中～近世のかわらけ・内耳鍋・焙烙などが見られる。

各調査区の基本層序は、

Ⅰ　褐色土　白色火山灰を多量に含む（耕作土）

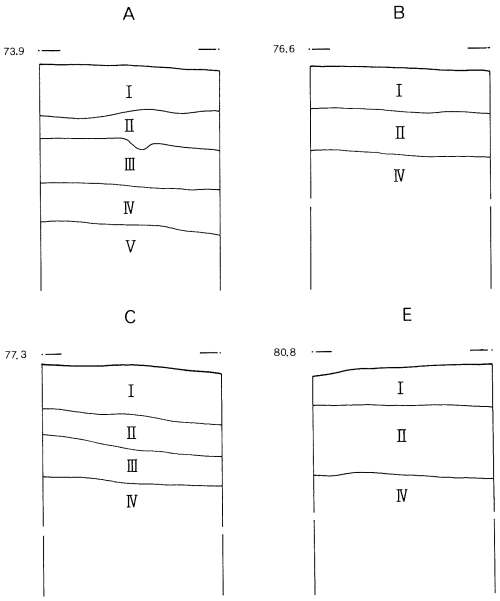
Ⅱ　褐色土　Ⅰ・Ⅲ層の混土層、焼土・炭化物粒子を少量含む

Ⅲ　暗褐色土　焼土・炭化物粒子を多量に含む（遺物包含層）

Ⅳ　茶褐色土　砂礫を少量含む二次堆積ローム

Ⅴ　礫　層

である。



第6図　大杉遺跡基本層序

2　遺構と遺物

A区

遺構

遺跡の北東端、県道菅谷寄居線の交差点から110mの区間である。B区側のAN９G（標高75.7m）から交差点側のAW１Gへ３mほど緩く傾斜している。トレンチ調査を実施したが、耕作のための深耕が各所に見られ、遺構は検出されなかった。

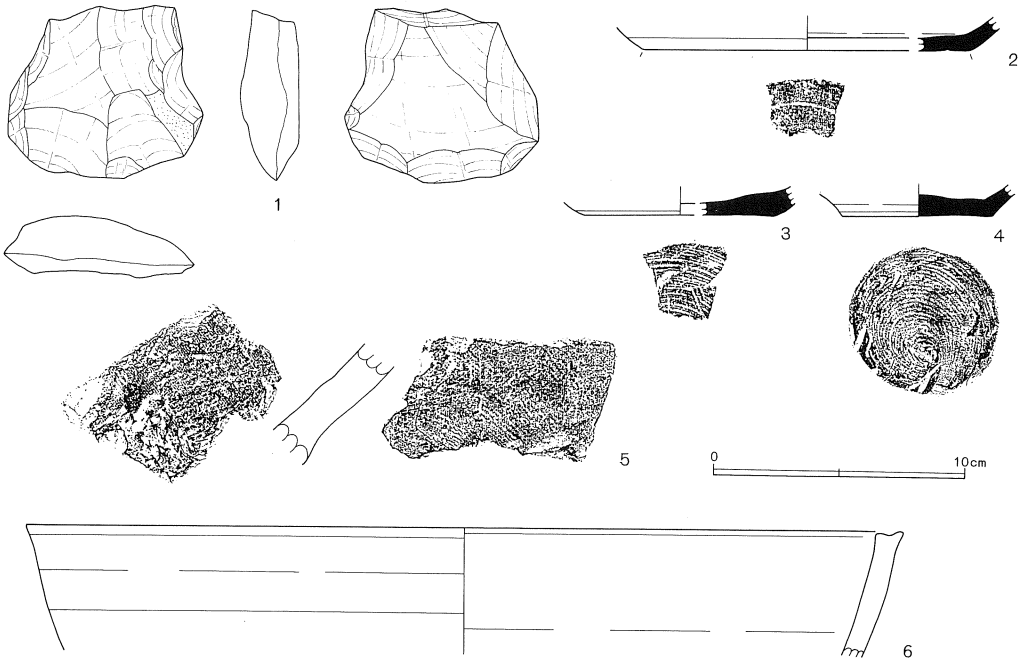
遺物（第７図）

Ⅱ層およびⅢ層中から72点の遺物が出土しているが、小破片が多く図示できたのは、６点と僅少である。時期・種別としては、８世紀から10世紀代の土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕、中世の焙烙・内耳鍋などである。

1　打製石斧　　裏面からの打撃で刃部側半分を欠く、分銅形か。両面から大きな剝離で形成され、片面に一部自然面を残す。残存長6.8cm、幅7.7cm、厚さ2.4cm、重さ176ｇ、砂岩製。

2　坏　須恵器　　推定底径13cm、底部全面回転ヘラ削りの大形品、８世紀前半と思われる。底部には胎土中の砂粒が移動した沈線が見られ、内面整形は雑で凹凸がある。胎土には、白色砂粒・白色針状物質を多量に含む。焼成良好、濃青灰色。南比企窯跡群産。

3　坏　須恵器　　推定底径7.8cm、底部回転糸切り離し後未調整。胎土に少量の白色針状物質と黒色砂粒を含む。焼成やや不良、茶灰色、南比企窯跡群産。

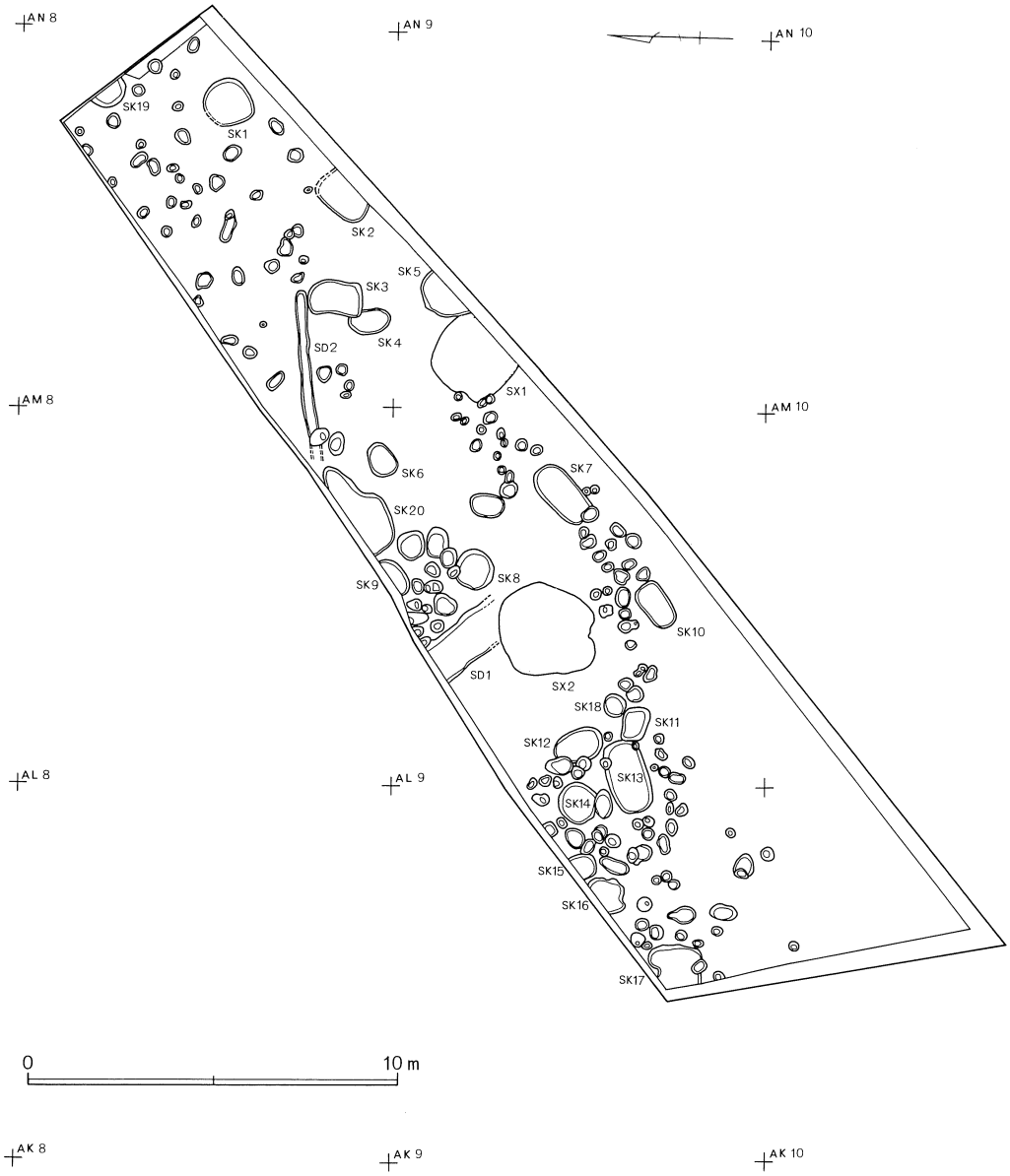


第７図　大杉遺跡Ａ区出土遺物

4　坏須恵器　　底径6.0cm、底部が僅かな上げ底で、体部が外反しながら立ち上がる。底部は、回転糸切り後未調整。胎土に少量の白色針物質と小礫含む。焼成不良、茶灰色、南比企窯跡群産。

5　中世陶器　　在地産須恵器系陶器の底部付近。内面には、緑色の釉がかかる。外面は、斜め方向の細かな刷毛目が残る。胎土は混入物が少なく、焼成良好、赤褐色。

6　内耳鍋　　推定口径35cm、口縁部の立ち上がりが強く、口唇上には沈線が存在する。内・外面とも細かなロクロ痕が残る。胎土きめ細かく、焼成も良好。黒灰色。



第８図　大杉遺跡Ｂ区全体図

B区

遺構

A区に隣接する調査区でAM８・ＡＬ９Ｇを中心とする。確認面での標高75.1m～75.8mほぼ平坦である。基本層序がA区と異なり、Ⅲ層の遺物包含層である暗褐色土層が堆積していなかった。風倒木痕や耕作の攪乱などで遺構が消滅した部分も存在するが、土壙20基、溝２条、AM８・ＡＫ９・ＡＬ９Ｇに柱穴群が検出できた。

土壙（ＳＫ・第９・10図）

第１号土壙

ＡＭ８Ｇ、122×129×12cmの不整円形、覆土はロームブロックを多量に含む黒褐色土。遺物の出土は無い。

第２号土壙

ＡＭ８Ｇ、南半部の一部に攪乱が存在する。154×87×９cm、不整円形と思われる。遺物の出土は無い。

第３号土壙

ＡＭ８Ｇ、ＳＫ４と重複関係に有る。144×84×５cm、隅丸長方形。覆土中から９世紀代の土師器甕底部片が３点出土している。

第４号土壙

ＡＭ８Ｇ、ＳＫ３に切られている。104×65×８cmの隅丸長方形。遺物の出土は無い。

第５号土壙

ＡＭ９Ｇ、南半部が調査区外のため未調査。140×73×16cm、円形と推定される。遺物の出土は無い。

第６号土壙

ＡＬ８Ｇに位置する。90×73×20cmの隅丸長方形。遺物の出土は無い。

第７号土壙

ＡＬ９Ｇ、180×90×８cmの長方形。南西隅で柱穴を切っている。覆土は、ローム粒を多量に含む黒褐色土であった。遺物の出土は無い。

第８号土壙

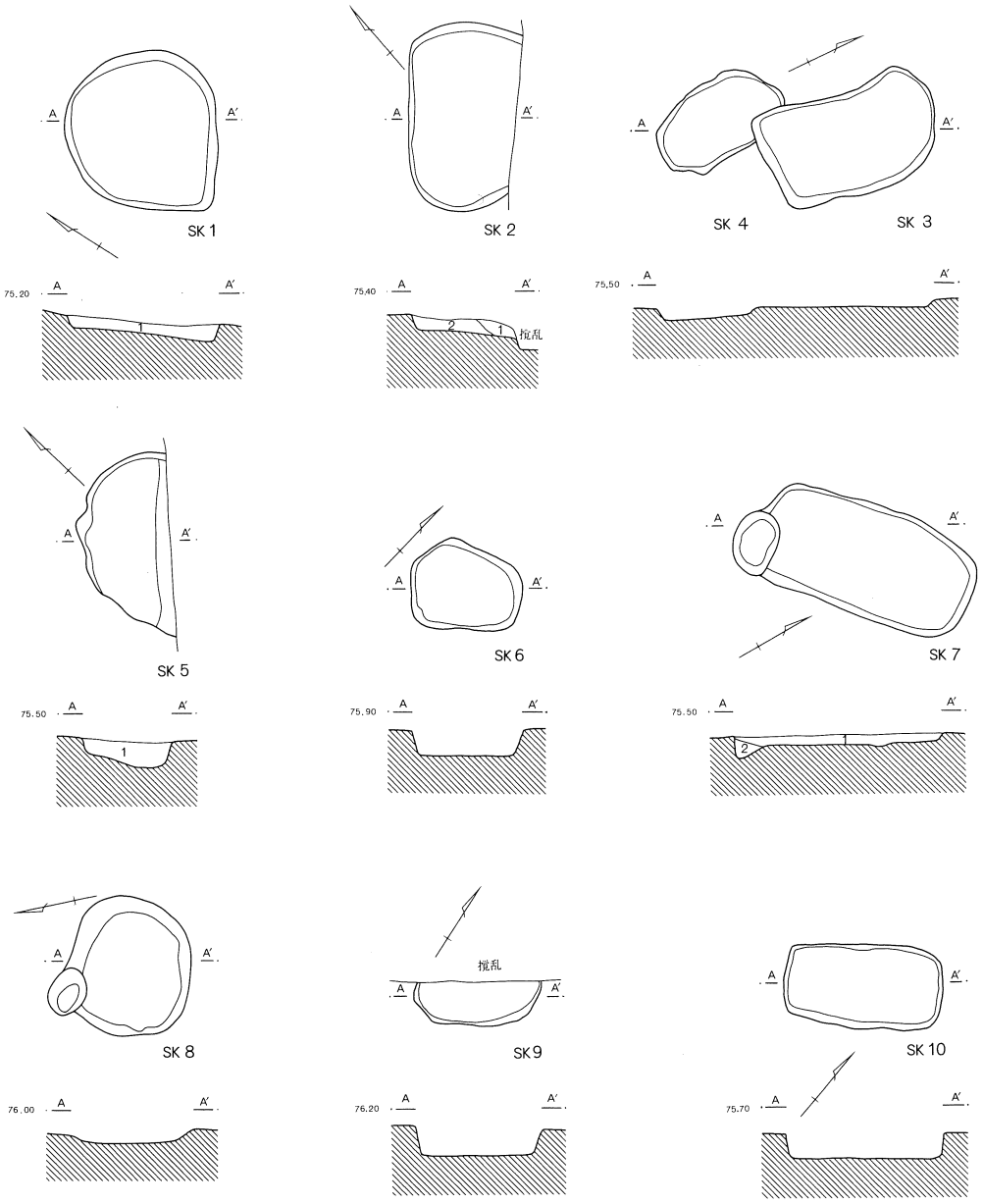
ＡＬ９Ｇ、100×103×８cm、円形。周辺に、ＳＫ９・ＳＫ20・ＳＤ１や柱穴群が集中分布する。南片を柱穴で切られている。遺物の出土は無い。

第９号土壙

ＡＬ９Ｇ、南半部が調査区外のため未調査。103×？×26cmの隅丸長方形になると推定される。遺物の出土は無い。

第10号土壙

ＡＬ９Ｇ、ＳＫ７と長軸方向を同じくしている。130×72×21cmの隅丸長方形。遺物は、出土しなかった。



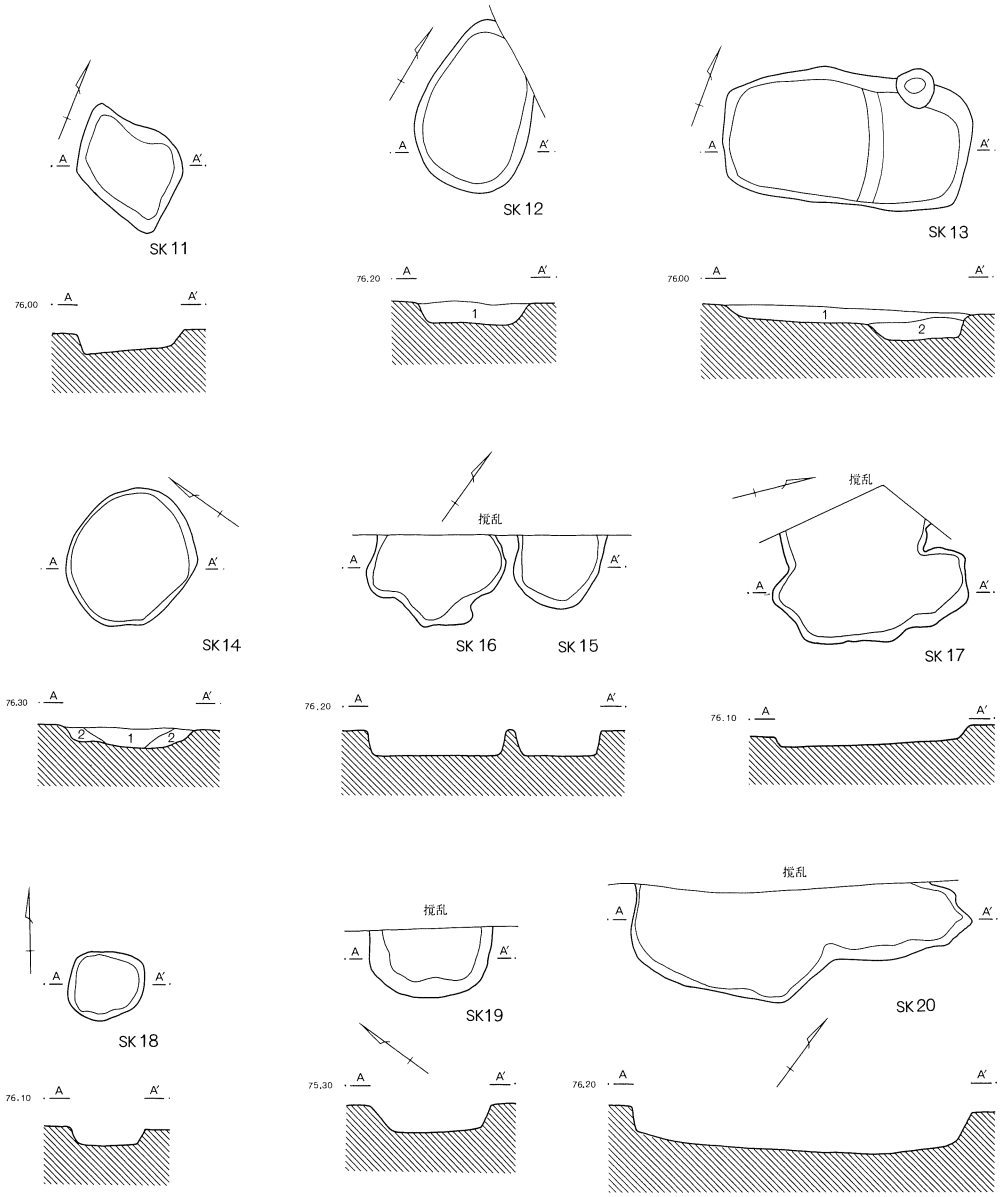
ＳＫ１　１ 黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量に含む。粘性強い。

ＳＫ２　１ 暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量に含む。粘性強い。
　　２ 暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。粘性強い。

ＳＫ５　１ 黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。粘性強い。

ＳＫ７　１ 黒褐色土　ローム粒を多く含有する。粘性弱い。
　　２ 褐 色 土　ローム粒を微量に含む。粘性強い。

第９図　大杉遺跡Ｂ区土壙 (1)



S K12　1 褐 色 土　　ローム粒・焼土粒・炭化物粒を微量に含む。

S K13　1 褐 色 土　　ローム粒を多く含む。焼土粒・炭化物粒を微量に含む。
　　2 暗褐色土　　ローム粒を微量に含む。

S K14　1 暗褐色土　　ローム粒・焼土粒を微量に含む。
　　2 黄褐色土　　ローム小ブロックを含む。

0　2m

第10図　大杉遺跡Ｂ区土壙　(2)

第11号土壙

ＡＬ９Ｇ、周辺には第12～18号土壙が集中して分布している。88×68×16cm、菱形。遺物の出土は無い。

第12号土壙

ＡＬ９Ｇ、132×90×16cmの隅丸長方形。遺物は、９世紀代の土師器甕２点・中世のかわらけが１点出土している。

第13号土壙

ＡＬ９Ｇ、ＡＫ・ＡＬ９Ｇにかけて分布する土壙群で最大規模、196×106×24cm。底面西側の一部が一段下がるが、重複は認められなかった。覆土として褐色土・暗褐色土が堆積し、覆土中から南比企窯跡群産の８世紀前半代の須恵器坏１点、土師器甕６点および中世のかわらけ１点が出土している。

第14号土壙

ＡＫ９Ｇ、ＳＫ13・ＳＫ15の中間にある。107×96×15cm、ほぼ円形。暗褐色・黄褐色・褐色土の３層が自然堆積していた。

第15号土壙

ＡＫ９Ｇ、ＳＫ16と隣接し、北半部が調査区外。？×68×20cm、遺物は出土していない。

第16号土壙

ＡＬ９Ｇ、ＳＫ15の西側に近接する。北半部が調査区外。？×110×20cm、不整円形か。覆土中より９世紀後半代の土師器甕が１点出土している。

第17号土壙

ＡＬ９Ｇ、調査区の北西隅で検出された。？×154×６cm、形状不明。覆土は、茶褐色土で、遺物の出土も無かった。

第18号土壙

ＡＬ９Ｇ、ＳＫ11に近接する。60×56×14cm、不整方形の小形の土壙。遺物出土はない。

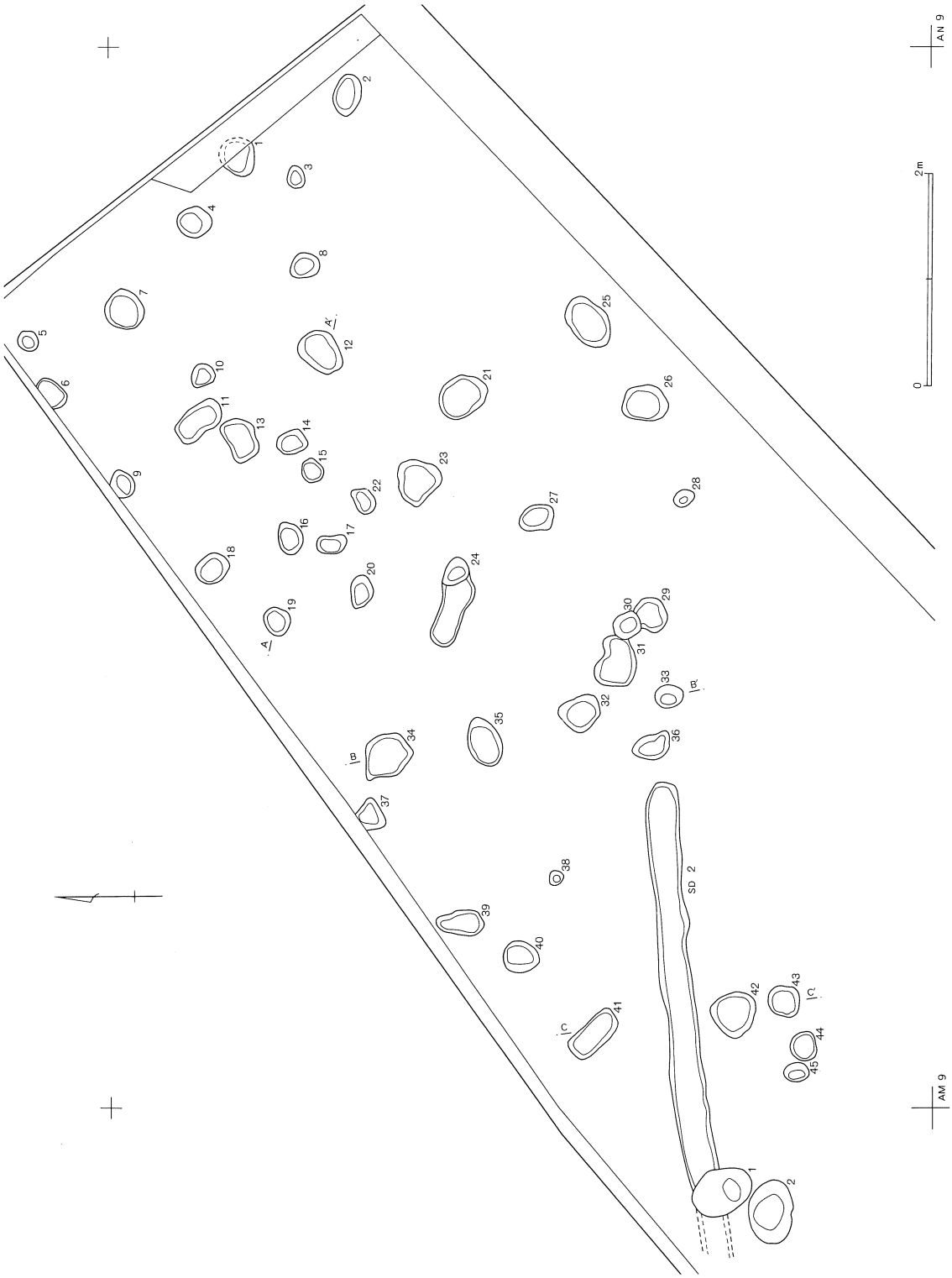
第19号土壙

ＡＭ８Ｇ、調査区の北東隅に検出され、東半部が調査区外のため未調査。？×94×20cm。覆土は褐色土１層で、遺物も検出されなかった。

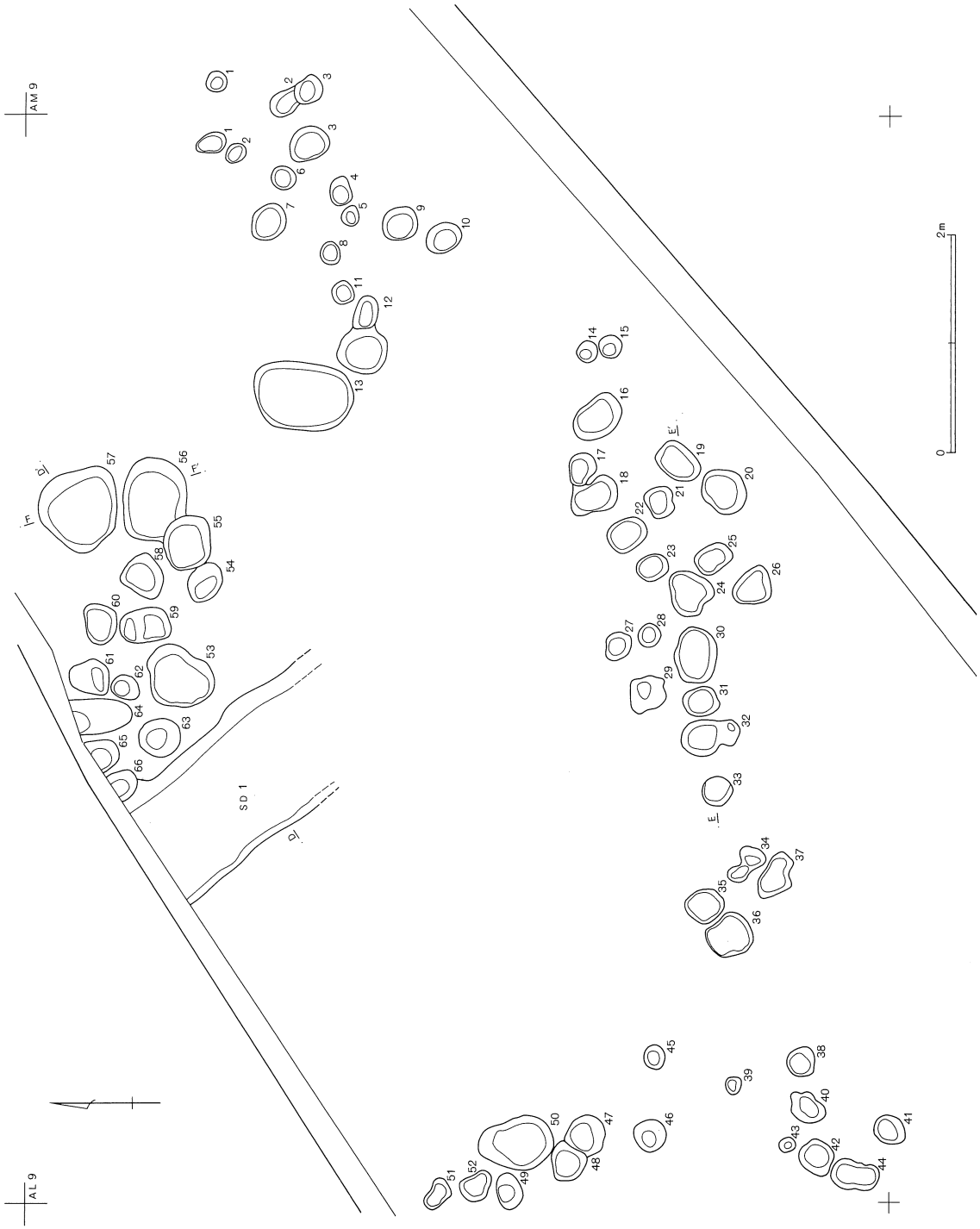
第20号土壙

ＡＬ８Ｇ、北半部が調査区外のため未調査である。270×？×30cm、形状不明。覆土が他土壙と異なり、しまりのある黒褐色土が堆積し、覆土中から縄文前期黒浜式土器の細片が検出された。

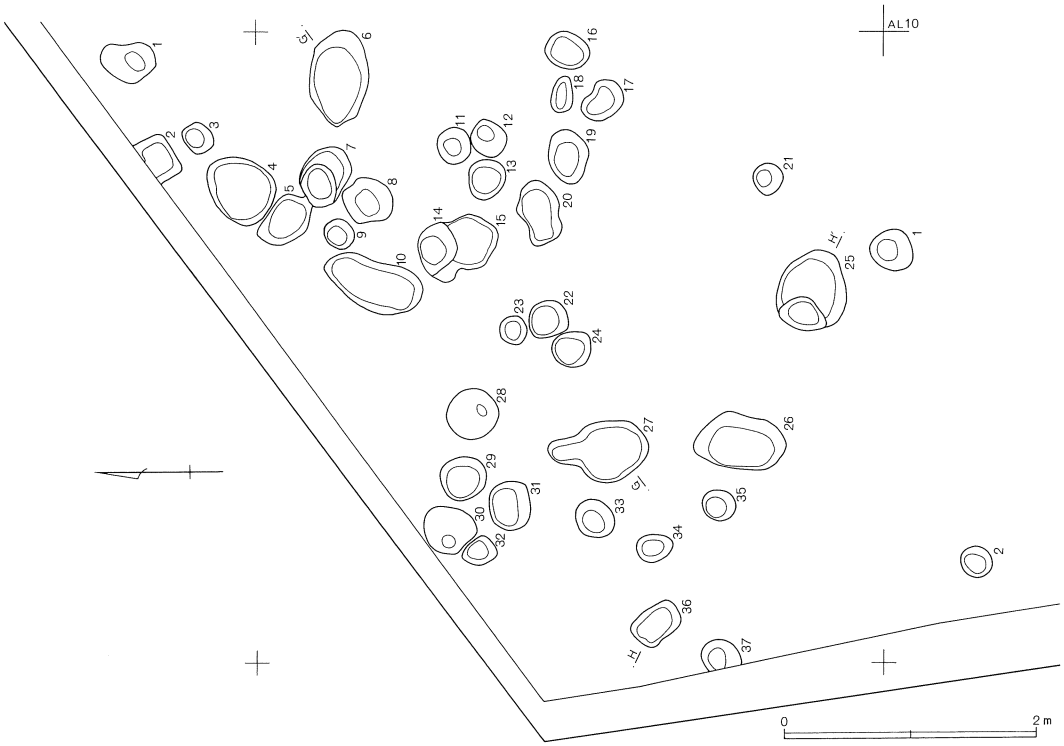
以上の様にＢ区では、20基の土壙が確認されたが、総じて時期決定のできる出土資料が少ない。第３号土壙から９世紀代の土師器甕、第12号土壙から同じく９世紀代の土師器と中世のかわらけ、第13号土壙から８世紀前半代の須恵器坏とかわらけ、第16号土壙から９世紀後半代の土師器、第20号土壙から縄文前期黒浜期の土器が出土している様に、土壙群には時期差がある。



第11図　大杉遺跡Ｂ区第２号溝・ＡＭ８Grid 柱穴群

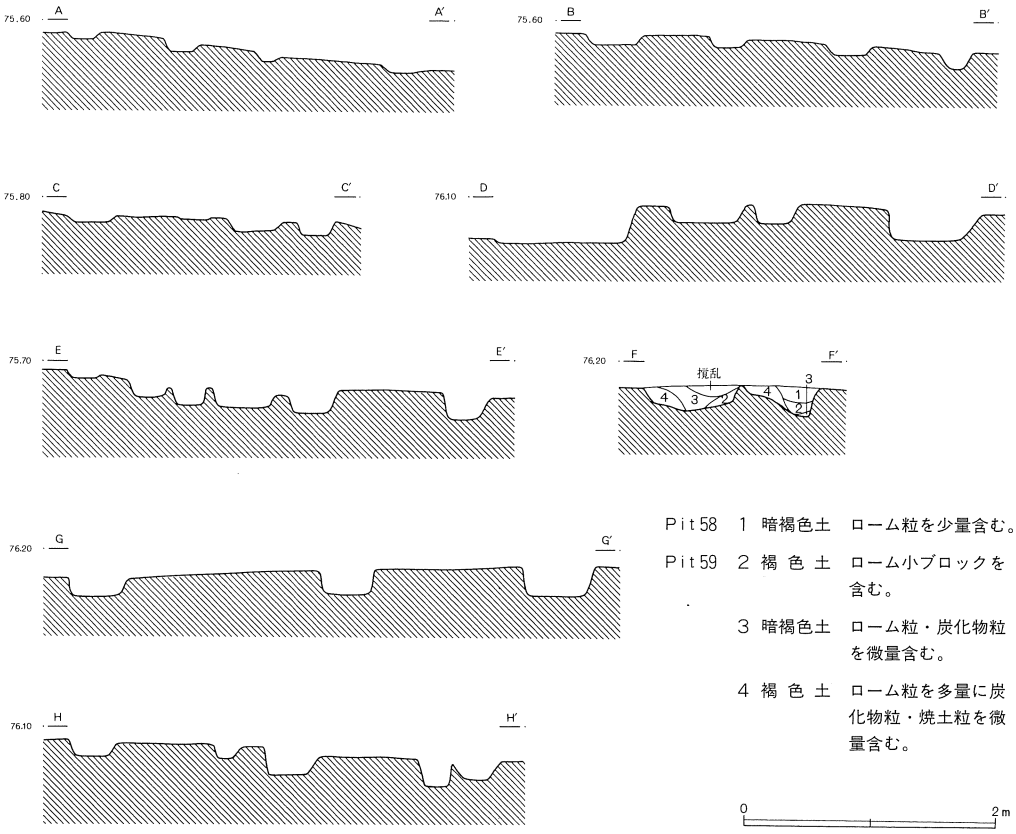


第12図　大杉遺跡Ｂ区第１号溝・ＡＬ９Grid 柱穴群



第13図　大杉遺跡Ｂ区ＡＫ９Grid 柱穴群

大杉遺跡Ｂ区柱穴群



第14図　大杉遺跡Ｂ区第１・２号溝、柱穴群

溝（ＳＤ・第11・12・13図）

柱穴群の分布区域内に２条の溝が検出されている。

第１号溝

ＡＬ９Ｇ、ＳＫ８に近接して検出された。ＳＸ２（風倒木痕）に攪乱され途中で途切れているが、ＳＫ７付近に集中する柱穴群の位置で検出されないので、もとから柱穴群まで延びていなかったものと推定される。残存長98cm・幅57cm・深さ15cmの平底の溝である。覆土は、ローム粒・ロームブロックを多量に含むしまりの良い黒褐色土であり、時期を判断できる遺物の出土は無かった。

第２号溝

ＡＭ８Ｇ、ＳＫ３に近接した位置に先端部があり、西側を柱穴に切られ消滅しているが、調査区壁の断面観察では僅かな痕跡が認められ、さらに西へ延びているものと推定される。残存長194cm・幅16cm・深さ２cmと狭く浅い溝である。覆土は、ロームブロックを少量含む茶褐色土で、遺物は検出されなかった。

柱穴群（第11・12・13図）

柱穴群の挿図は、各グリッド単位で作図したが、ここでは調査区全体を一括して説明することにした。

柱穴群は、ＳＫ１・ＳＫ２によって一部攪乱され消滅しているが、ＡＫ10Ｇ・ＡＬ10Ｇを除く調査区全域に柱穴群が分布している。ＡＫ10Ｇ・ＡＬ10Ｇは、基盤層の砂礫層が他のグリッドより浅いため、もともと柱穴群は存在していなかった可能性が強い。土壙および溝との重複関係が随所に見られるが、中世の所産であるＳＫ12には切られている。検出できた柱穴群も他の遺構と同様に５cm～20cmと浅く覆土の状態が不良なものが大半を占め、柱痕などが確認できたものがなかった。

柱穴群は、掘立柱建物跡・杭列・柵列などいろいろと想定することができるが、検出状態や調査範囲に制限があり、その性格を明確に断定することができない。

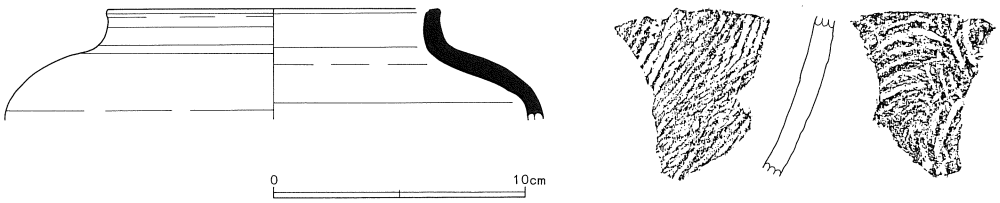
遺物は、小破片が多く、またその出土量も少ないが、ＡＭ８ＧやＡＬ９Ｇの柱穴群から僅かに出土している。ＡＭ８ＧのＰ２から土師器坏・甕・南比企窯跡群産の須恵器坏、Ｐ13須恵器坏、ＡＬ９ＧのＰ32から土師器甕、Ｐ39から土師器坏・甕と須恵器坏、Ｐ57から土師器坏、Ｐ61から南比企窯跡群産の須恵器坏が出土している。出土した須恵器の多くは、９世紀後半代の時期である。

図示できたのは、わずか２点である。

柱穴群出土遺物（第15図）

1　短頸壷　須恵器　　口径13.2cm・残高5.4cm・外面の口縁から肩部・内面口唇上端部に濃緑色の自然釉がかかる。緩やかな肩部からほぼ直立して口縁部が立ち上がる。口唇はつままれ僅か突出、口唇内面が一段くぼむ。内外面とも整形は丁寧。胎土は、白色砂粒を含むが緻密である。焼成も良く堅緻、青灰色。

2　甕　須恵器　　胴下半部の破片、内外面に叩き目を明瞭に残す。胎土は、白色・黒色砂粒を多めに含みザラついている。焼成は良く、黒灰色。

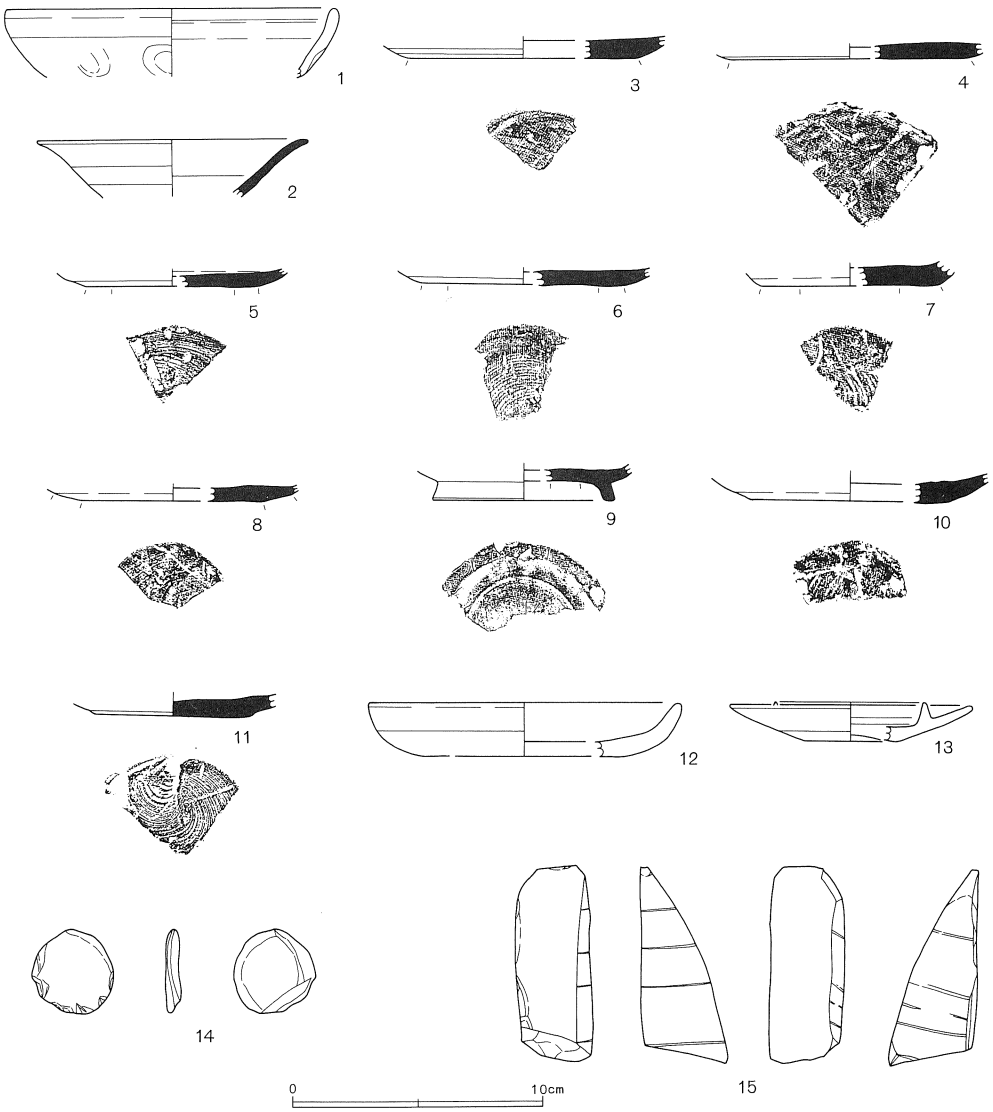


第15図　大杉遺跡Ｂ区柱穴群出土遺物

Ｂ区

出土遺物（第16図）

遺構検出作業中にⅠ・Ⅱ層中より100点余りの遺物が検出されたが、いずれも小破片のため図示できたのは、15点である。時期・種別としては、８～９世紀代の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕、中近世のかわらけ・内耳鍋・灯明皿・砥石などである。



第16図　大杉遺跡Ｂ区出土遺物

1　坏
土師器
　推定口径13.2cm、体部から直立ぎみに口縁部が立ち上がる。体部外面下部には、指頭圧痕が明瞭に残り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデが施され滑沢。胎土は、白色砂粒多量に含む。焼成は良好、赤褐色。

2　坏
須恵器
　推定口径10.8cmの小形坏。体部の外反が著しく、口縁部がさらに開く。内外面ともロクロ痕明瞭に残る。白色砂粒・白色針状物質を多量に含む。焼成良好、濃灰色。南比企窯跡群産。

3　坏
須恵器
　推定底径9.2cm、底部整形が全面回転ヘラ削りか糸切り後周辺ヘラ削りか判然としないのが８世紀代の坏である。胎土には、多量の白色針状物質が含まれている。焼成良好、濃茶灰色。南比企窯跡群産。

4　坏
須恵器　推定口径9.6cm、底部全面回転ヘラ削りの坏。内面整形が雑で凹凸がある。胎土に白色砂粒・白色針状物質を少量含む。焼成不良、茶灰色。南比企窯跡群産。

5　坏
須恵器　推定口径6.8cmの小形の坏。底部回転糸切り後周辺ヘラ削り、内面整形も丁寧、外面一段屈曲し、体部が立ち上がる。白色針状物質多量に含む、南比企窯跡群産。焼成良く、青灰色。

6　坏
須恵器　推定口径8.0cm、底部回転糸切り後周辺ヘラ削り。内面丁寧にナデ調整が施され、平滑である。白色針状物質多量に含む、南比企窯跡群産。焼成良好、濃灰色。

7　坏
須恵器　推定口径7.0cm、底径に比較して厚みのある坏。底部回転糸切り後周辺ヘラ削り。白色砂粒少量、黒色砂粒・白色針状物質多量に含む。焼成やや不良、茶灰色。

8　坏
須恵器　推定口径7.2cm、底部回転糸切り後無調整。体部外面の立ち上がりにヘラ削りが施され、平坦面が作られている。白・黒色砂粒多く、白色針状物質少量含む。焼成良い黒灰色。南比企窯跡群産。

9　高台坏
須恵器　推定口径7.2cm、底部中央に僅かな糸切り痕が残り、周辺はヘラ削りが施されている。高台貼付後の整形も丁寧である。体部は、屈曲ぎみに立ち上がるようである。白色の大粒砂粒が目立ちややざらつくが、焼成は良い。南比企窯跡群産。

10　坏
須恵器　推定口径8.0cm、底部回転糸切り後無調整。底部の糸切りも内面のナデ整形も雑に施されている。胎土に黒色砂粒と片岩細粒を少量含む。焼成は不良、茶灰色。末野窯跡群産。

11　坏
須恵器　推定口径6.2cm、底部回転糸切り後無調整。底部から体部が「く」の字状に段を持ち、強く外反して立ち上がるようである。黒色微砂粒多量・白色針状物質少量含む。焼成良好、黒灰色。南比企窯跡群産。

12　かわらけ　推定口径12.4cm・器高2.1cm。内外面とも剝落が著しく、整形不明。底部から体部が器厚があまり変化せず緩やかに立ち上がり、口唇部が丸く収められている。赤色・黒色砂粒多量に含む。焼成は不良、赤褐色。

13　灯明皿　推定口径9.6cm・器高1.5cm。一般的な油皿の内側に受けをめぐらした受け付き灯明皿である。底部は著しい上げ底で、受けが口縁より高く突出している。内外面とも鉄釉がかけられている。煤の付着や二次的焼成の器面の変化は見られない。胎土は、混入物も少なくきめ細かく、焼成も良く堅い。

14　土製品　直径3.2cm・厚さ0.6cm。土師器甕の破片を再利用して作られている。不整円形で片面から成形のための剝離が施され、一部磨かれている。また、他面は全面丁寧に磨かれ、平滑に仕上げられている。

15　砥石　残存長7.5cm・厚さ0.5～3.3cm・幅2.5cm・重さ98ｇ、泥岩製。断面台形、表裏二面が使用されている。両側面とも母材から、分割する際のたがね痕が明瞭に残っている。

C区

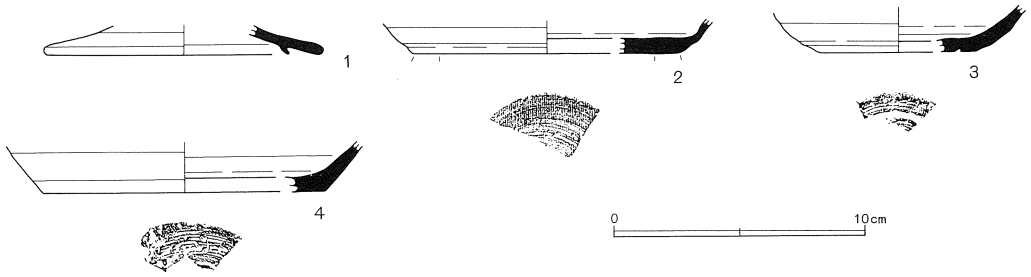
遺構

B区の西側に私道を挟み、ＡＪ10Ｇを中心とする小面積の調査区である。人家に近接しているため重機による表土剝ぎが不可能なので、表土より人力で遺構検出作業を実施した。調査区の層序は、基本的にＡ区と同じであるが、Ｖ層の礫層がやや深くなっている。

密なトレンチ調査を行なったが、遺構は検出されなかった。

遺物（第16図）

Ⅲ層の遺物包含層である暗褐色土中から、９世紀代の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、中世のかわらけが出土し、表採で近世の内耳鍋・陶器などが採集されている。しかし、いずれの遺物も細片が多く、図示できたのは、僅かに４点である。



第17図　大杉遺跡Ｃ区出土遺物

1　蓋　須恵器　推定口径11.2cm、かえりの付いた小形の蓋で小片のため細かな整形は不明である。口唇部はやや肥厚し、口唇端部が丸く収められている。かえりは、内側基部をヘラで押えられ強く外反している。黒色砂粒多く、赤色砂粒・片岩細片少量含む。焼成やや不良、茶灰色。末野窯跡群産。

2　坏　須恵器　推定底径10.6cm、底部厚に対して体部厚が極端に薄いつくりの坏。体部が一段屈曲して立ち上がる。底部整形は、回転糸切り後周辺ヘラ削りが施されている。内面整形も丁寧で平滑に仕上げられている。白色砂粒・白色針状物質を少量含む。焼成も良好、濃青灰色。南比企窯跡群産。

3　坏　須恵器　推定底径6.4cm、体部が緩やかに立ち上がり、丸みを帯びた坏。回転糸切り後無調整、底部には大きめの砂粒が移動した沈線が存在する。また、体部には、凹凸が明瞭に残り、雑な作りである。白色砂粒・片岩細片多量。焼成は良く堅緻、青灰色。末野窯跡群産。

4　坏　須恵器　推定底径11.0cm、体部が底部より直線的に立ち上がる大形の坏。底部整形は、回転糸切り後無調整。底部・体部の接点に面取りのヘラ削りが施してない。外面整形は比較的雑であるが、内面は丁寧に行なわれ平滑。白色砂粒少量、白色針状物質多量、焼成良好、青海色。

D区

遺構

遺跡南半の標高84～82mの緩傾斜面に位置した調査区で、現道を挟み、E区と対峙している。この調査区もトレンチ調査を実施した。調査区には、人家が建築されていたので厚い客土が堆積し、また、深くまで攪乱されていたので大半のⅡ・Ⅲ層が失われ、客土を排土するとⅢ層の二次堆積ロームが直接露出する状況であった。そのためか、遺構は検出されなかった。

遺物（第18図）

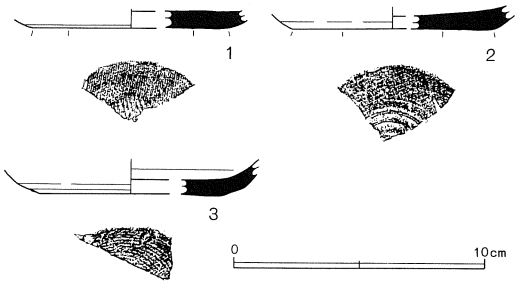
部分的に残っていたⅢ層暗褐色土中から土師器坏・甕、須恵器坏と人家に伴う客土から江戸～明治時代の陶器が出土している。総数40点余りであるが、総じて細片のため図示できたのは僅か3点である。

1　坏
須恵器

推定底径7.8cm。底部整形は、回転糸切り離し後周辺ヘラ削りが外周1.4cmの幅に施されている。

内面は丁寧にナデ整形が行なわれているが、凹凸が目立つ。

胎土には白色針状物質及び白色砂粒を多めに含む。焼成は良い、濃青灰色。南比企窯跡群産。



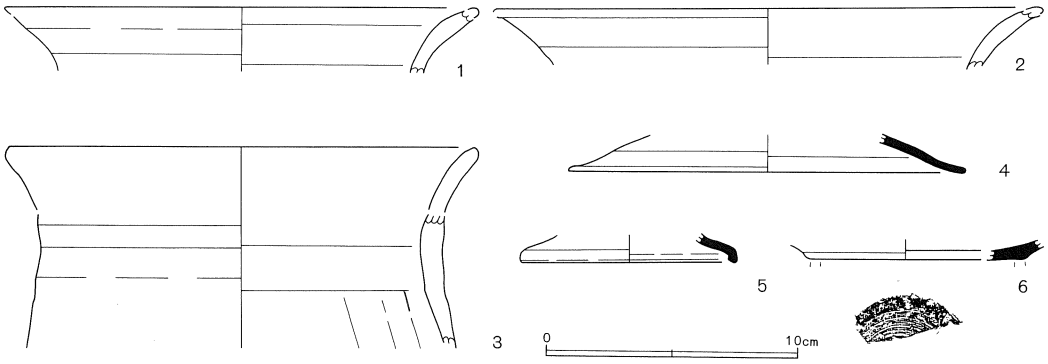
第18図　大杉遺跡D区出土遺物

2　坏
須恵器

推定底径8.0cm、底・体部の境が肥厚した坏。回転糸切り離し後、周辺ヘラ削りの底部整形が施されている。赤色・黒色の砂粒を多量に、白色針状物質を少量含む。焼成は良好、茶灰色。南比企窯跡群産。

3　坏
須恵器

推定底径7.2cm。底部から体部の器厚があまり変化せず緩く立ち上がる小形の坏。底部整形は、回転糸切り離し後無調整。白色砂粒・白色針状物質少量含む。焼成良好、濃青灰色。南比企窯跡群産。



第19図　大杉遺跡E区出土遺物

E区

遺構

現道を挟みD・F区の反対側で、標高83m～82m、D・F区同様緩く南へ下る。昭和60年3月に指定解除になった元埼玉県指定天然記念物「永昌寺の大マツ」の直前に位置した調査区である。

遺構は、検出されなかった。

遺物（第19図）

遺構確認作業中に検出された遺物としては、いずれも小破片であるが、土師器甕、須恵器坏・蓋などがある。

1　甕　土師器　推定口径18cm、口縁部の器厚が頸部より肥厚して「く」の字状に強く外反する甕の口縁部。内外面とも横ナデ整形が施されている。胎土は、白色・赤色の細砂粒を少量含む。焼成は良好、赤褐色。

2　甕　土師器　推定口径22cm、口縁部の外反が強い甕。表裏面とも器面の荒れが著しく、細かな整形は不明。黒色砂粒少量含む。焼成は良く、赤褐色を呈する。

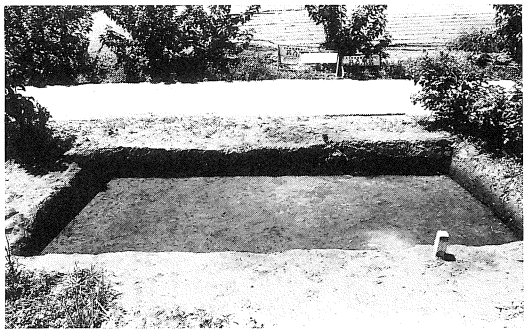
3　甕　土師器　頸部での推定径16cm、頸部がほぼ直立し口縁部が緩く外反するものと推定される。外器面は、荒れて横ナデが僅かに認められる程度である。内面は、横ナデと口縁部方向へのヘラ削り整形が施されている。胎土に、黒色砂粒多量に含む。焼成は良好、茶褐色。

4　蓋　須恵器　推定口径16cm、体部から口縁部への移行が緩やかな蓋。内外面とも丁寧なナデ整形が施され平滑に仕上げられている。口唇部は丸く収められ、僅かに肥厚する。胎土は黒色砂粒と片岩細粒を少量含む。焼成はやや不良で茶灰色。末野窯跡群産。

5　蓋　須恵器　推定口径8.8cm、口径に比べ厚みのある小形の蓋。口縁部が体部からほぼ直角に折れ、口唇端部内面がやや浮いている。内外面とも、丁寧なナデ整形が施されている。白色針状物質が少量観察される。焼成は良好、濃青灰色。南比企窯跡群産。

6　坏　須恵器　推定底径9.6cm、底部は回転糸切り離し後ヘラ削りが行なわれている。ヘラ削りは雑で、高台が剝がれた可能性もある。赤色・黒色砂粒・片岩を少量含む。焼成不良で灰白色。末野窯跡群産。

大杉遺跡F区近景



大杉遺跡F区トレンチ

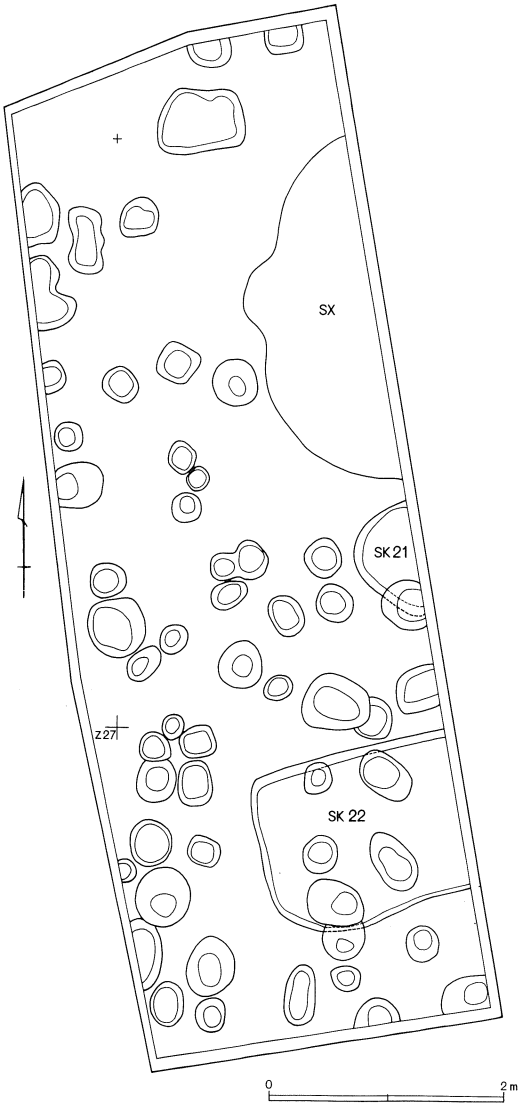
F区

遺構

大杉遺跡の最南端に該当し、今回の調査で最も低い地点にある調査区で、標高82m～81m緩く南に下る斜面に位置している。幅約50m、比高差４mの沖積地を挟み岡原遺跡の所在する台地と対峙している。

この調査区も幅が狭いためトレンチ調査を実施した。基本層序は、B区と同様にⅢ層の遺物包含層の堆積が無く、Ⅱ層直下に二次堆積ロームが検出された。

遺構は、土壙２基と柱穴群が検出できた。



第20図　大杉遺跡Ｆ区全体図

土壙（第20図）

第21号土壙

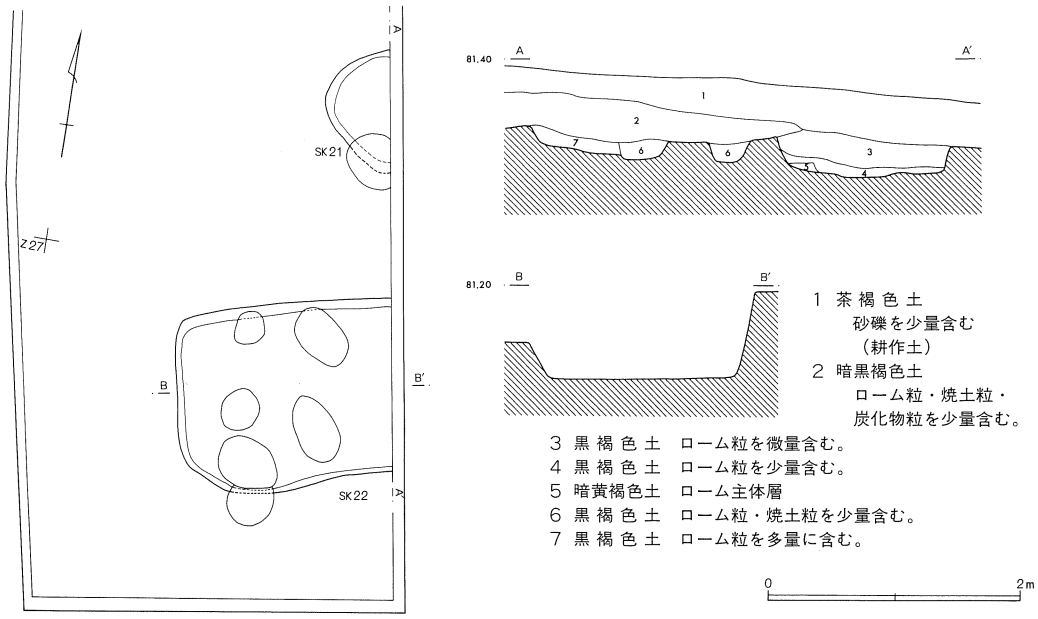
Ｚ26Ｇ、調査区の東壁下に検出されたため詳細な形態、規模は不明である。

検出面最大幅95cm、深さ10cm、南辺の一部を柱穴で壊されている。

覆土は、ローム粒を多量に含む黒褐色土が堆積していた。

床面直上より縄文前期黒浜式土器の縄文のみ施文された土器細片が２点出土している。第20号土壙と同時期である。

大杉遺跡Ｆ区近景



第21図　大杉遺跡Ｆ区土壙

第22号土壙

Ｚ27Ｇ、調査区の南東壁直下に所在しているため、東側半部ほどが調査区外で未調査である。検出面での規模は、長さ172cm・幅148cm・深さ30cmである。不整長方形の土壙と推定され、南および北辺を数基の柱穴で切られ、覆土には茶褐色土と黒褐色土が自然堆積していたが、覆土中からの遺物の出土は無かった。

柱穴群（第22図）

柱穴群は、調査区の北東部に土壙・柱穴群よりも新しい時期の所産と考えられる風倒木痕のために一部消滅しているが、調査区全域に分布している。

掘立柱建物跡や柵列などを想定して調査を行なった。検出面での覆土の観察では、ローム粒含有の多少に差が認められたが、大半が近似した茶褐色土であったため共伴関係を把握することは不可能であった。また、柱穴どうしの重複関係が存在しているので、詳細に断面観察を実施したが良好な成果を得ることができなかった。

遺物（第23図）

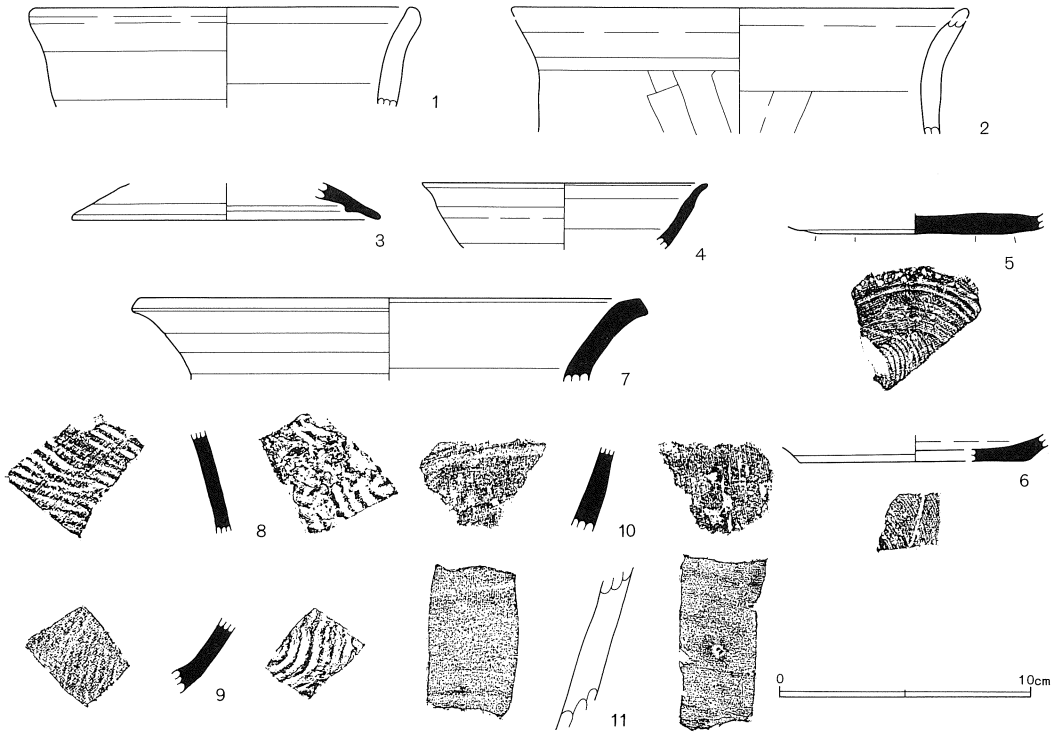
1　甕
土師器　　推定口径15.8cm、口縁部が僅かに外反する小形の甕。内面・外面とも丁寧にナデ整形が施され、器面が平滑である。白色・赤色砂粒を少量含む。焼成は良好、赤褐色。

2　甕
土師器　　推定口径18.2cm、直立ぎみの胴部から緩く外反する口縁部を持つ甕。胴部は、底部から口縁部方向へのヘラ削り、口縁部には横ナデ整形が行なわれている。白色砂粒を多量に含むため器面がザラついている。焼成は良い、赤褐色。

第22図　大杉遺跡F区柱穴群

3　蓋
須恵器　　推定口径12.4cm、内面にかえりが付き、口径に比べ厚みのある蓋。内外面ともナデ整形が丁寧に行なわれ平滑。口唇部は丸く収められ、かえりの内側は直角に押さえられている。白色砂粒と白色針状物質を少量含む。焼成は良好で堅緻、濃青灰色、南比企窯跡群産。

4　坏
須恵器　　推定底径11.4cm、緩やかに立ち上がる体部から口縁部が強く押えられ急激に器厚を減じて、強く外反するが、口唇部がやや尖り、内面に平坦面をもつ。内外面ともナデ整形が施されているが、凹凸が目立つ。白色針状物質を少量含む。焼成は良く、濃灰



第23図　大杉遺跡Ｆ区出土遺物

色。南比企窯跡群産。

5　坏　須恵器　推定底径8.0cm、回転糸切り離し後、周辺ヘラ削りが施された坏。底部から体部へ移行に僅かな段差をもつ。黒色砂粒・白色針状物質少量含む。焼成不良、茶灰色。南比企窯跡群産。

6　坏　須恵器　推定底径9.2cm、底部整形が回転糸切り離し後、無調整。胎土に少量の黒色砂粒と片岩細片含む。末野窯跡群産。

7　甕　須恵器　推定口径20.8cm、口唇部が角張った甕。口唇外・上面に平坦面を持ち、先端が突出する。口縁外面には、二条の沈線が施され、内面はナデが加えられている。焼成は良好、濃青灰色。末野窯跡群産。

8　甕
9　須恵器
10　8は胴部中位、9は底部付近、両者とも内外面に明瞭なタタキ痕が残る。10は胴部下位、両面がナデられている。いずれも焼成は良好で、黒灰色である。8・10は末野窯跡群産。

11　常滑　大甕の胴部下位の破片。両面に茶黄色の釉がかかる。胎土は、大粒の白色砂粒を少量含む。焼成は良好で堅緻。

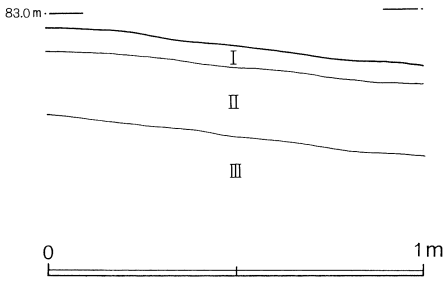
Ⅳ　岡原遺跡の調査

1　遺跡の概観

岡原遺跡は、報告する三遺跡で中央に位置している。遺跡の所在する台地は、大杉遺跡と同じ峯山から派生したもので、市野川に向かって西から東へ延びる台地である。大杉遺跡とは、市野川の支流が形成した幅約50mの沖積地で隔てられている。調査区での標高82m～86m、沖積地との比高差は、最大で約７mを測る。

遺跡の広がりは、東西900m・南北250mで緩い弧状を描いている。特に遺物が集中して散布する地点の存在は確認されないが、全面に平安時代の土師器・須恵器を中心に散布している。

今回の調査は、現道両脇の拡幅部が対象であったので便宜上、左・右をA区・B区に分けて実施した。A・B両調査区は、A区の最も広い地点で最大幅が４mしかないために、重機の表土剝ぎが不可能であったためすべて人力による調査を実施した。



第24図　岡原遺跡基本層序

調査の結果、A区では近世の井戸跡が検出され、B区は現道の攪乱が深くまで及んでおり、遺構を確認することができなかった。

調査区は、遺跡を横断する状態であったが、遺構の稀薄な地点であった可能性が強い。

岡原遺跡の基本層序は、

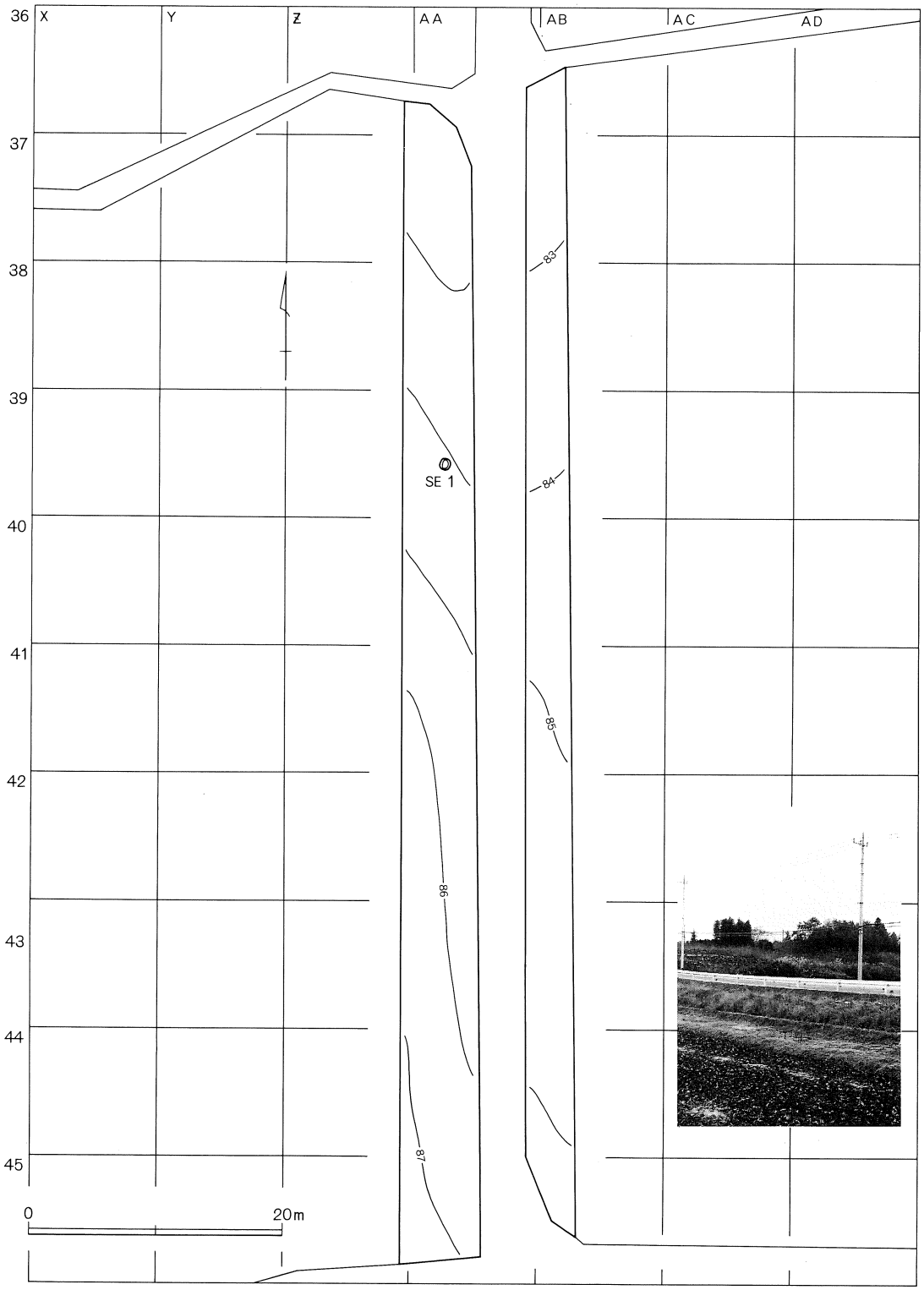
Ⅰ　黄褐色土　小礫を多量に含み粘性が強い。（耕作土）

Ⅱ　黄褐色土　小礫を少量含む二次堆積ローム（基盤層）

Ⅲ　暗褐色土　礫を多量に含む粘質土

であり、表土直下に遺構確認面が表われてしまう状態であった。

岡原遺跡調査風景



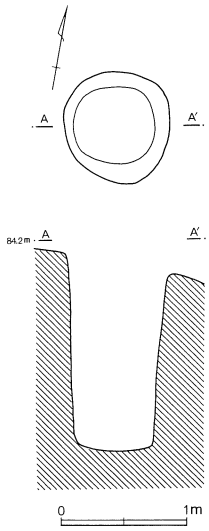
第25図　岡原遺跡全体図

遺構

岡原遺跡で検出された遺構は、A区の井戸跡１基である。

第１号井戸跡（第26図）

ＡＡ39Ｇ、標高84ｍの緩く北へ下る斜面に表土直下より検出された。80×90×155㎝、南北にやや長い不整円形の井戸跡である。覆土は、砂礫を多量に含む茶褐色土であったが、自然埋没ではなく、一時期に埋められたものである。覆土中から明治時代の陶磁器片が少量検出された。



第26図　岡原遺跡井戸跡

遺物（第27・28図）

表土剝ぎや遺構検出作業中に約50片の遺物が検出された。須恵器坏の破片が大半を占めているが、他に縄文土器・土師器・中近世の内耳鍋や陶磁器などが認められた。

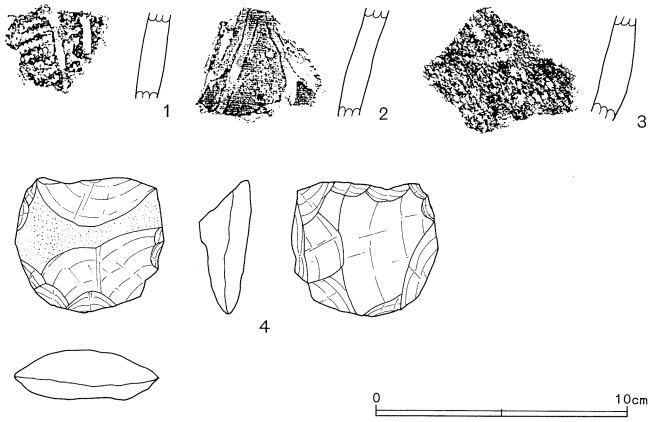
1 2 3　深鉢　縄文中期加曽利Ｅ式期の深鉢の胴部である。１・２は、地文に縄文が施され、垂下する沈線間の縄文が擦り消されている。

３は、縄文のみ施文された胴下半部。

4　打製石斧　裏面からの打撃で半砕したもの。

表面は、刃部を作り出すための調整剝離が行なわれ、裏面は大きな剝離が残されている。

5　台付甕　土師器　台付部径5.2㎝、外面ハケ、内面細かなヘラ削り整形が施されている。五領期のものと思われる。



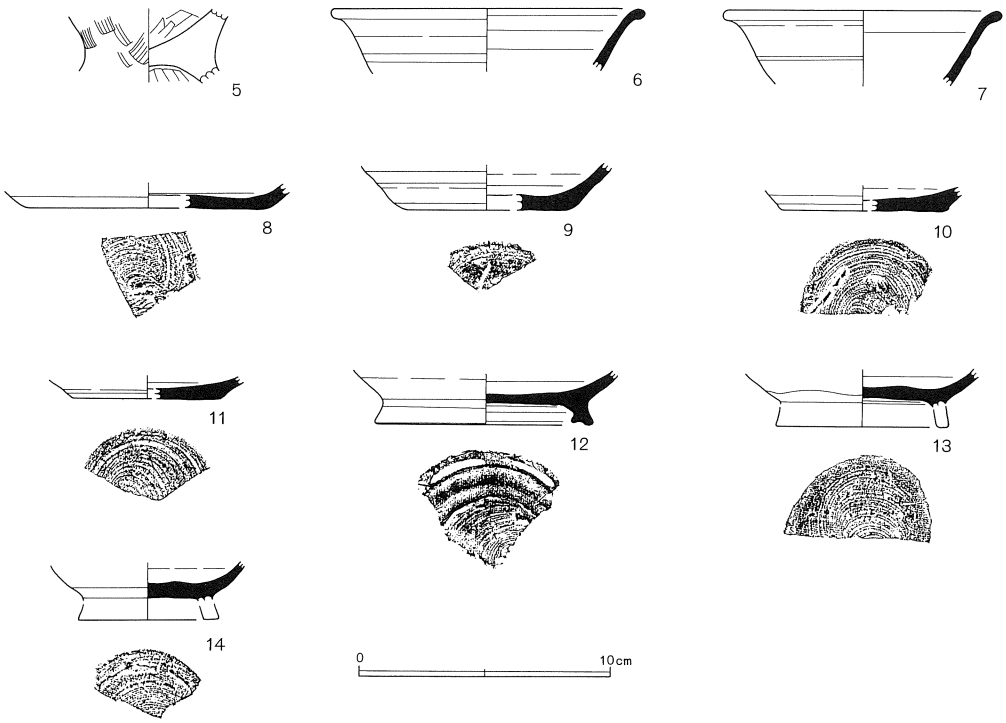
第27図　岡原遺跡出土遺物（１）

6　坏　須恵器　推定口径11.2㎝、丸く収められた口唇部が肥厚し、ほぼ直角に折れて外反する。内外面とも丁寧なナデ整形が施され器面が平滑に仕上げられている。胎土には、少量の黒色砂粒を含む。焼成は良好、灰白色。末野窯跡群産と推定される。

7　坏　須恵器　推定口径10.6㎝、口径に比べ、深みがある坏。体部に比べ口唇部が著しく肥厚し、外反する。外面には、凹凸が明瞭に認められるが、内面は平滑に整形されている。胎土には、黒色砂粒と片岩が少量含まれる。焼成は良い、灰白色。末野窯跡群産。

8　坏　須恵器　推定底径9.6㎝、底部整形が回転糸切り離し後、無調整の大形の坏。体部が緩く立ち上がるものであろう。内外面とも整形が良く、器面が平滑である。

胎土は、白・黒砂粒を微量含むだけできめ細かい。焼成も良く、青灰色。



第28図　岡原遺跡出土遺物（２）

9　坏
須恵器　推定底径6.6cm、底部と体部の移行面に雑なヘラ削りが行なわれ平坦面が形成されている。底部の整形は、回転糸切り離し後無調整。黒・赤色の細かい砂粒を多量に含む胎土である。焼成は良好で濃灰色呈する。末野窯跡群産か。

10　坏
須恵器　推定底径6.8cm、底部整形が、回転糸切り離し後無調整の坏。体部と底部の接合面および底部糸切りの粘土が付着したままの雑な整形である。胎土には、一見して末野窯跡群産と識別できるほどの大粒の片岩片を含んでいる。焼成も不良、茶灰色。

11　坏
須恵器　推定底径5.6cm、小形で体部の外反が強いと推定される坏。底部の整形は、回転糸切り離し後無調整である。黒色・赤色砂粒を多量に含む。焼成は良く、濃青灰色。

12　高台坏
須恵器　推定底径8.8cm、接地面に沈線が存在する高台が付けられている。高台部の断面が「八」字状に広がり、外側端部のみ接地する。底部の整形は、回転糸切り離し後無調整である。黒色微砂粒を少量含むがきめ細かい。焼成は不良で、茶灰色。

13　高台坏
須恵器　推定底径7.0cm、高台部が剝落している。内外面ともナデ整形があまり丁寧でなく粘土屑や器面の凹凸がめだつ。底部の整形は、回転糸切り離し後無調整である。赤色・黒色砂粒を少量含み、焼成は良好。濃灰色。末野窯跡群産と推定される。

14　高台坏
須恵器　推定底径5.6cm、高台部が剝落した小形の高台坏。底部整形は、回転糸切り離し後無調整である。内外面ともナデ整形が丁寧に行なわれている。胎土も黒色の微砂粒を少量含むだけできめ細かい。焼成も良好で、灰白色。

V　蟹山遺跡の調査

1　遺跡の概観

蟹山遺跡は、県道本田小川線の事業地内にかかる遺跡としては最も南に位置し、大杉遺跡から約1㎞、岡原遺跡からは0.7㎞の距離にある。

遺跡は、北に後谷津川が形成した幅200mほどの沖積地を間に挟み、大杉・岡原遺跡とは別の台地に所在している。遺跡が所在する台地は、西方の大笹にある標高195mの頂きから、北に先程の後谷津川、南に中谷津川に挟まれ、北東へ派生した一連の丘陵群の裾に展開する台地である。遺跡の標高90m～78m、緩く北および東へ下っている。

遺跡は、東西250m・南北200mの範囲に遺物の散布が見られ、小字の蟹山と道上の一部を包括している。地目として、多くが畑地・桑畑として利用されている。また周辺には、本田小川線の東側に縄文時代の片瀬遺跡、ニゴリ沼の南に平安時代を中心とした道下遺跡が所在している。

調査は、現道の拡幅部が対象であったので他の二遺跡同様に合流する町道・私道などを境界として、便宜上北側からA～F区に分割して実施した。

遺跡の基本層序は、　Ⅰ　褐色土　小礫を多量に含む粘質土（耕作土）

Ⅱ　褐色土　Ⅰ層より大きめの礫（20～30㎜）を少量含む粘質土

Ⅲ　礫　層

Ⅰ層の層厚15～20㎝、Ⅱ層の層厚20～30㎝である。

遺跡遠景

2　遺構と遺物

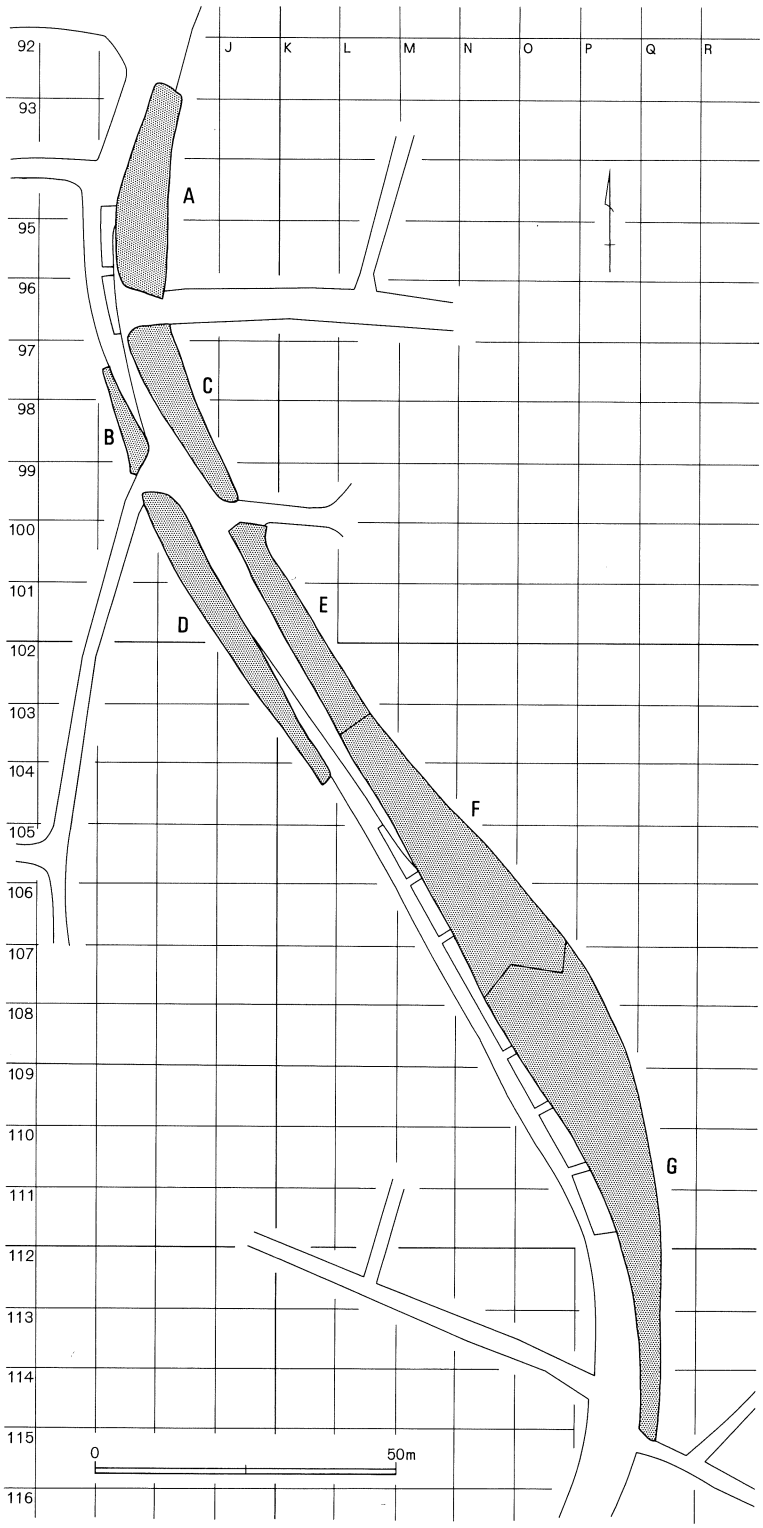
A区

北端部の調査区で、桑畑であった。トレンチ調査を実施したが、耕作が予想外に深く行なわれ、調査区全域が攪乱された状態であった。

遺構・遺物は、検出されなかった。

B・C・D区

現道を挟み向かい合う調査区である。三調査区とも台地を逆台形に切り込んで作られた現道の路肩に相当し、既に砂礫層迄が露出している状態であった。従って、遺構および遺物の検出は不可能であった。



第29図　蟹山遺跡全体図

E区

D区と相対する調査区で調査前に植木が植栽してあった。

トレンチ調査を実施したが、Ⅰ・Ⅱ層の堆積が薄く20cmほどで礫層に達してしまう状態であった。

遺構・遺物とも検出されなかった。

F・G区

遺構

蟹山遺跡で調査面積が最も広い調査区である。標高80m～79m緩く南へ下っている。調査前は桑畑に利用されていた。

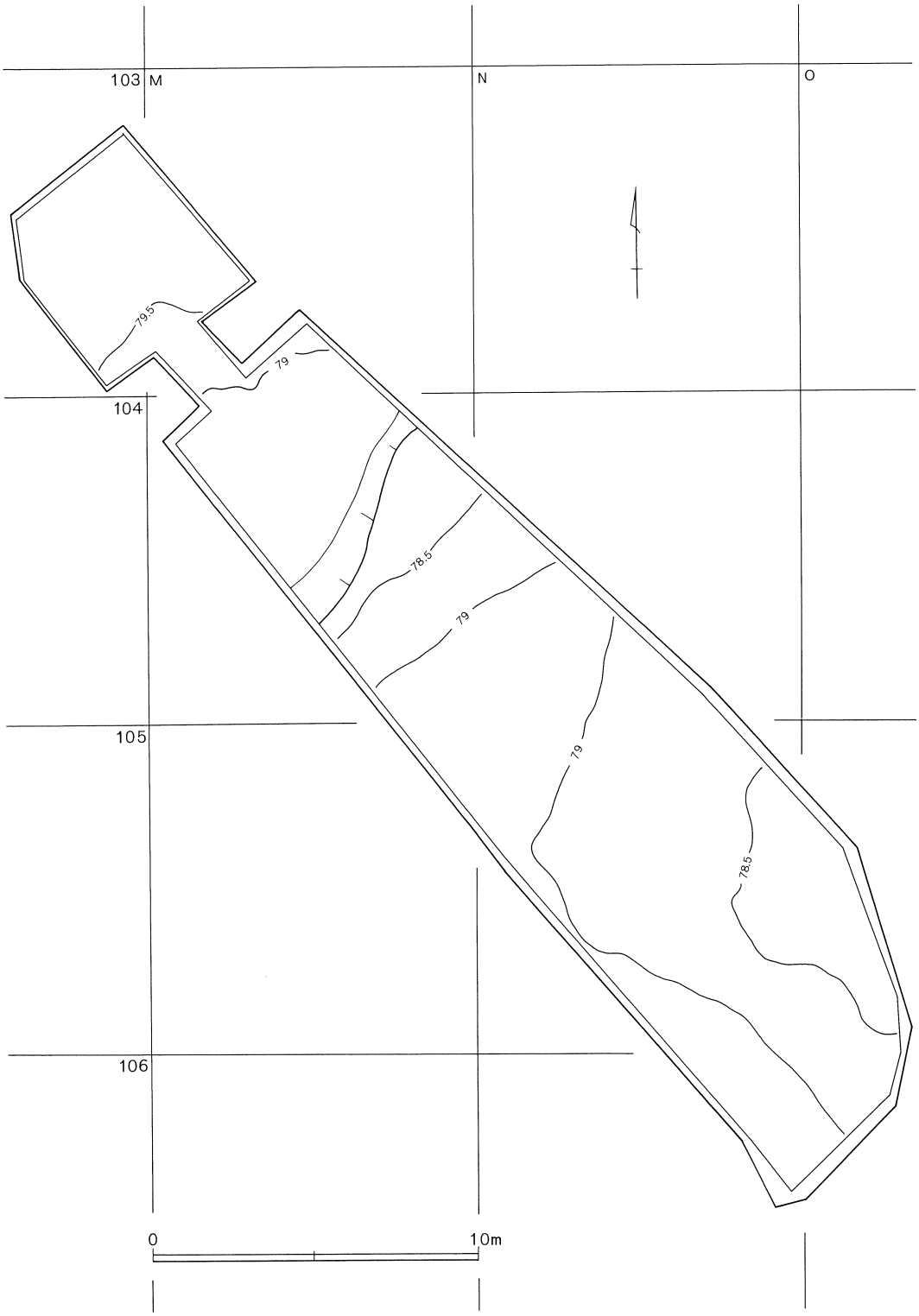
F区の中央で、底面が礫層に達し、北側の立ち上がりが不明瞭な浅い溝状の落ち込みが検出できた。しかし、壁面の断面観察から小さな埋没谷や流路などの自然地形と考えざるを得ないものであった。

F・G区とも遺構は検出することができなかった。

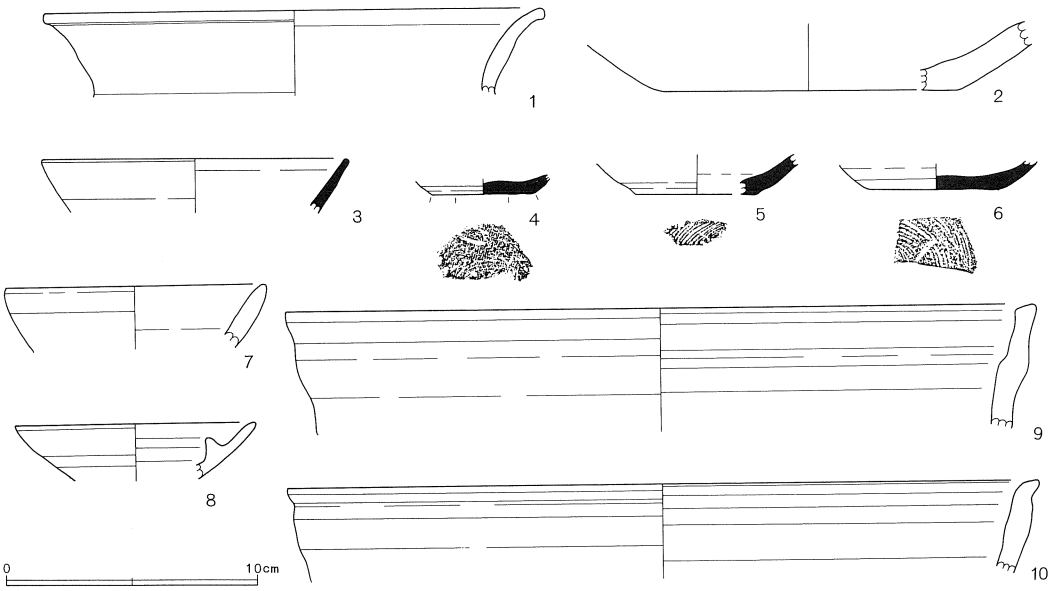
遺物（第31図）

遺物は、F区の遺構検出作業中、おもに表土およびⅡ層上面から出土したものである。

総数25片、9世紀代の土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕、中近世のかわらけ・



第30図　蟹山遺跡Ｆ区全体図



第31図　蟹山遺跡Ｆ区出土遺物

灯明皿・内耳鍋・陶器などである。実測不可能な細片が総体を占めているが、10点図示できた。

1　甕　土師器　推定口径20.0cm、口縁部の中位が肥厚し、緩く外反する。口唇部が直角に突出し、口唇下端が稜線を形成している。両面とも荒れているが、ナデ整形が施されている。黒色砂粒少量含む。焼成やや不良、茶褐色。

2　甕　土師器　推定底径12.0cm、緩く立ち上がる底部。小片で細かな整形は不明であるが、外面に僅かにヘラ削り痕が残る。白色・黒色砂粒を少量含むがキメ細かい胎土である。焼成良好、茶褐色。

3　坏　須恵器　推定底径12.2cm、口唇部がやや角張った小形の坏である。体部に比べ口唇部の器厚が薄く仕上げられている。内外面ともナデ整形が丁寧に施され平滑である。

白色針状物質を少量含む。焼成は良好、茶灰色。南比企窯跡群産。

4　坏　須恵器　推定底径4.2cm、底部整形が回転糸切り離し後無調整の小形坏。内外面とも、ナデ整形が雑で凹凸が目立つ。胎土は、赤色・白色・透明砂粒を少量含む。焼成やや不良、茶灰色を呈している。末野窯跡群産か。

5　坏　須恵器　推定底径5.0cm、底部が回転糸切り離し後無調整小形の坏。底部と体部の境が段差を持ち、底部が突出した状態である。黒色砂粒・片岩を少量含み、器面がザラつく。焼成良く、黒灰色。末野窯跡群産。

6　坏　須恵器　推定底径5.2cm、体部が丸みを帯びて緩く立ち上がる坏。内外面ともナデ整形が丁寧で器面が平滑に仕上げられている。底部整形は、回転糸切り離し後無調整である。黒色砂粒・片岩微量、焼成良く堅緻。末野窯跡群産。

7　かわらけ　推定口径10.4cm、口径に比べ器厚が厚く、口唇端部が尖る。内外両面とも丁寧なナデ整形。胎土は、白色針状物質を少量含むだけできめ細かい。焼成良好、赤褐色。

8　灯明皿　　推定口径9.6cm、口縁より低い受けが付いた灯明皿。内外面に鉄釉がかけられ、一部の口縁部の内外面に煤が付着している。内外面とも丁寧なナデ整形。白色砂粒少量含む。焼成は良好、赤褐色。

9　内耳鍋　　推定口径28.8cm、口縁がほぼ直立し、内面にクランク状に成形された蓋受けが存在する。口唇部は内剝状で、平坦に仕上げられている。内外面とも、ナデ整形である。透明砂粒少量、焼成良好、黒茶褐色。

10　内耳鍋　　推定口径30.0cm、９に比べ口縁部の外反が強い。口縁内面の蓋受けが僅かな段差として残り、口唇部が押えられ突出する。内外面ともナデ整形が施されている。黒色砂粒多量、焼成良く、黒褐色。

Ⅵ　まとめ

大杉・岡原・蟹山の三遺跡を対象とする今回の調査は、現道の拡幅部というきわめて限定された調査範囲で実施された。調査区が道路に沿い、かつ狭長なトレンチ状であったため、三遺跡とも遺構・遺物に関して断片的にしか把握することができなかった。ここでは、三遺跡の内では遺構・遺物とも最も検出数の多い大杉遺跡について、検出できた限られた資料をもとに、時期的な問題などを整理しておきたい。

大杉遺跡は、東西800m・南北550mの範囲で台地上全域に展開し、町内でも最大規模級の遺跡である。Ａ～Ｆの調査区は、遺跡の中央からＬ字形に遺跡を横断する形であった。遺構はＢ・Ｆ区から、遺物は全区から検出された。

本田小川線現況

遺構は、土壙・溝・柱穴群がある。検出された土壙は22基で、規模・形態ともバラエティーがあり、また、時期判定できる遺物の出土が少ないこともあり、個々の関連を把握することは不可能である。遺物を出土した土壙は、ＳＫ20・21が縄文前期黒浜期、ＳＫ３・16が９世紀後半、ＳＫ12・13が14世紀代である。

従来、平安時代の遺跡とされていた大杉遺跡から縄文時代前期、また中世の土壙が検出されたことは大きな成果と言えるだろう。特に、中世土壙の検出は、遺跡を縦断している鎌倉街道上道伝承地の存在、町場・重殿・南殿など中世居館を連想させる小字名など、今後調査の機会があれば確認されるであろう中世遺構の存在を暗示しているものと思われる。

柱穴群は、掘立柱建物跡・杭列跡・柵列跡などいろいろと考えられるが、調査時の所見でも組合わせや重複関係の把握が不可能であったため、その性格を特定することができない。時期としては、遺物を検出できたものは非常に少ないが、数基の柱穴から9世紀後半を中心とする時期の遺物が出土し、また、14世紀の遺物を出土した土壙に切られていることから、時間的な幅を持たさざるを得ないが、この期間に営まれたものである。

遺物では、各調査区から打製石斧、土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・甕・短頸壷、かわらけ・常滑大甕・内耳鍋・灯明皿・陶器、土師器の甕を再利用した土製品、砥石などが出土している。

図示したものが僅か27点であるが、各調査区から共通して出土した須恵器の蓋と坏を中心に、若干のまとめを行なうことにする。時期としては、8世紀後半代にまとまりがある。

初現の8世紀初頭のものとしては、第17図1・第23図3のかえりが付いた蓋がある。僅か2点であるが、それぞれ末野窯跡群・南比企窯跡群の製品である。

8世紀前半のものとしては、第16図3・4の底部全面ヘラ削り整形が施された口径の大きな坏である。末野窯跡群の製品は見られず、すべて南比企窯跡群の製品である。次の8世紀後半代の資料が大杉遺跡の主体をなしている。第16図5・6・第17図1・第18図1・2など底部整形が回転糸切り離し後周辺ヘラ削りで、全形を伺える個体はないが、口径が大きめで体部がやや緩く立ち上がる坏である。すべて南比企窯跡群の製品に比定される。

9世紀前半の資料は、第7図4、第16図10・11、第23図4などである。底部整形が回転糸切り離し後無調整で、体部が第23図4のように外反が強く口唇部が外側へ突出する小形の坏である。該期も南比企窯跡群の製品で末野窯跡群の製品は見られない。9世紀後半のものは、第16図2があり、底径に比べ口径が大きな皿に近い形状の坏で、末野窯跡群の製品である。

以上、限られた資料をもとに8～9世紀の須恵器蓋・坏について産地を中心にした事実記載の羅列を行ってきたが、大杉遺跡と窯跡群との供給関係の一端を参考にしていただきたい。

参考文献

小川町遺跡調査会　1987　『広見西遺跡発掘調査報告書』　小川町遺跡調査報告第1集

埼玉県教育委員会　1983　『鎌倉街道上道』　歴史の道調査報告書第1集

埼玉県教育委員会　1988　『埼玉の中世城館跡』

埼玉県立歴史資料館　1987　『埼玉の古代窯業調査報告書』

埼玉県立歴史資料館　1987　『研究紀要第9号』

写 真 図 版

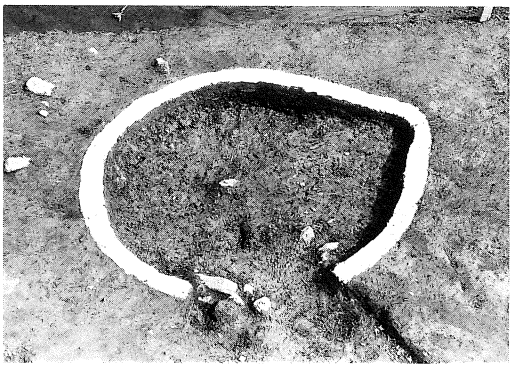
遺跡近景

B区全景

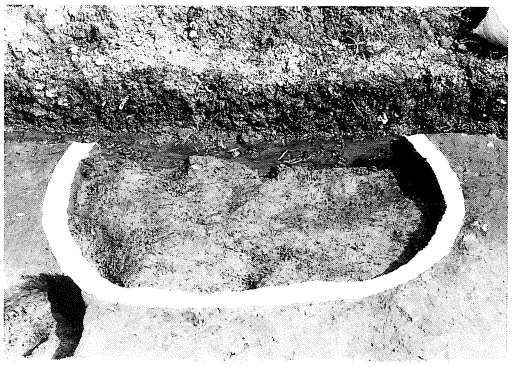
図 版 2

大杉遺跡

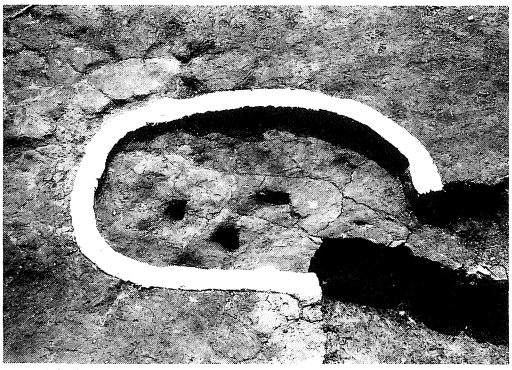
B区完掘状態



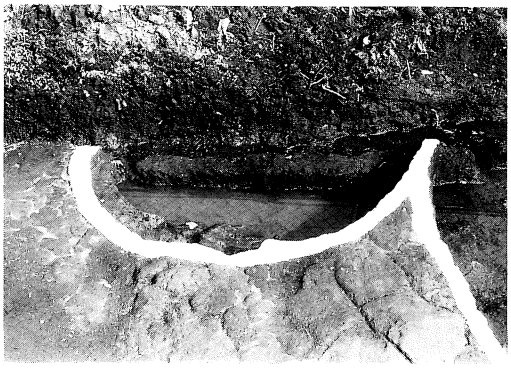
SK 1



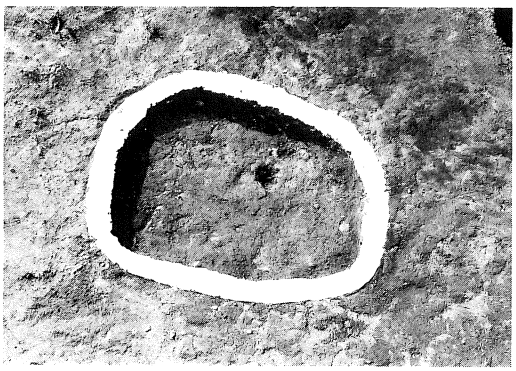
SK 2



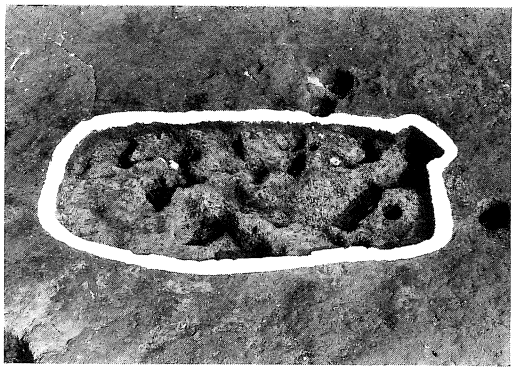
SK 4



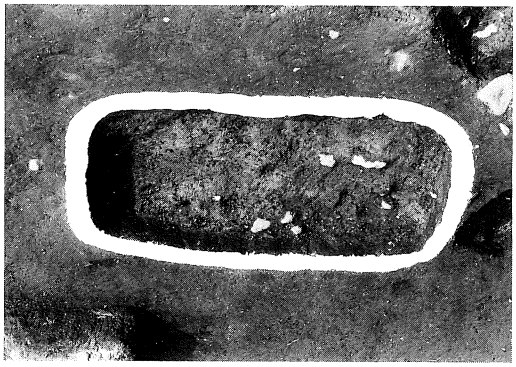
SK 5



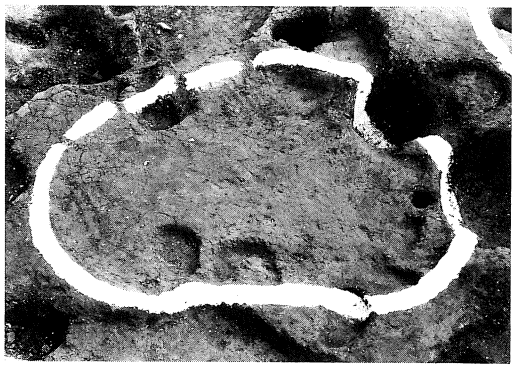
SK 6



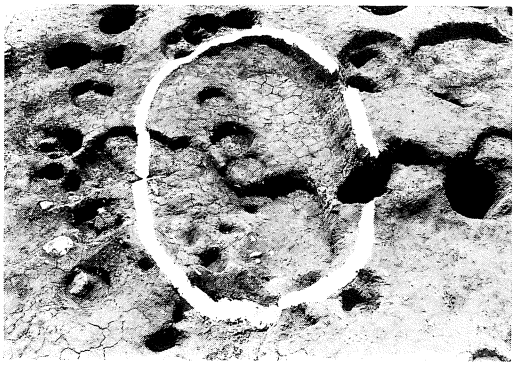
SK 7



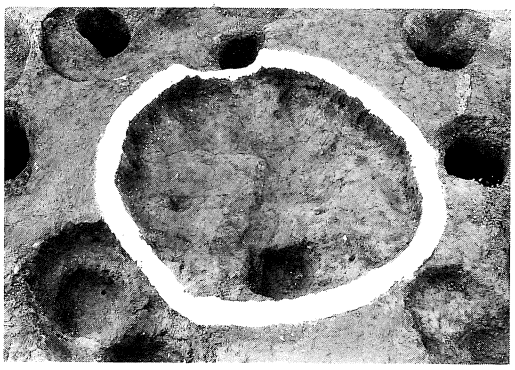
SK10



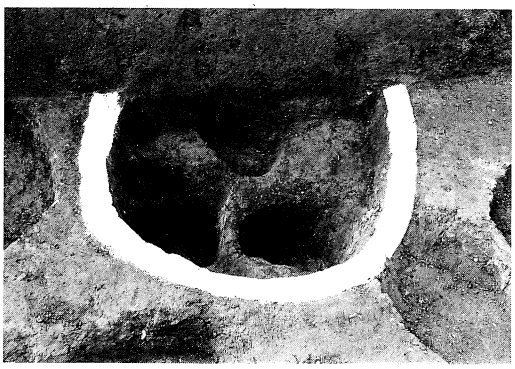
SK12



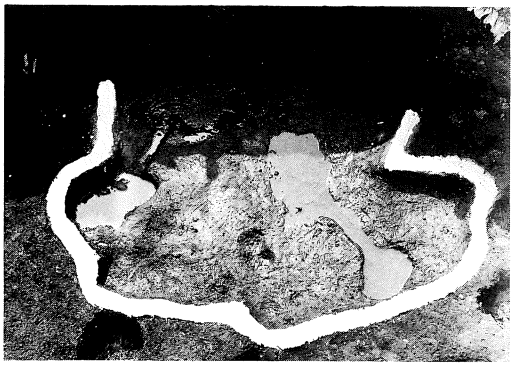
SK13



SK14



SK15

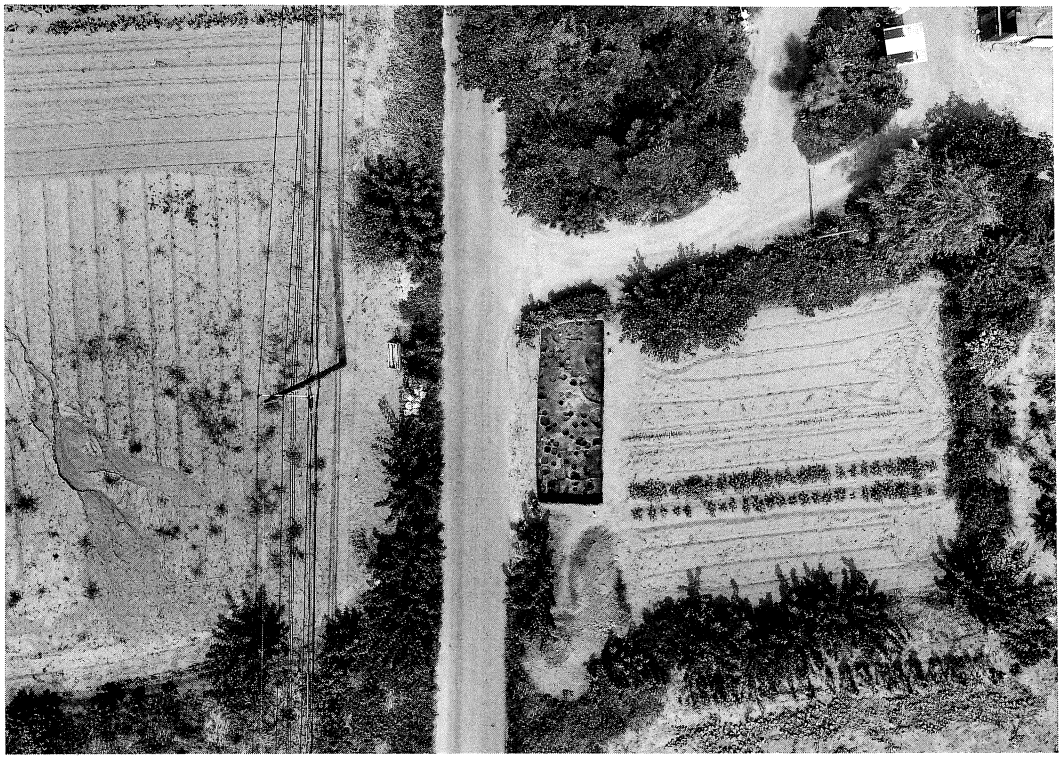


SK17

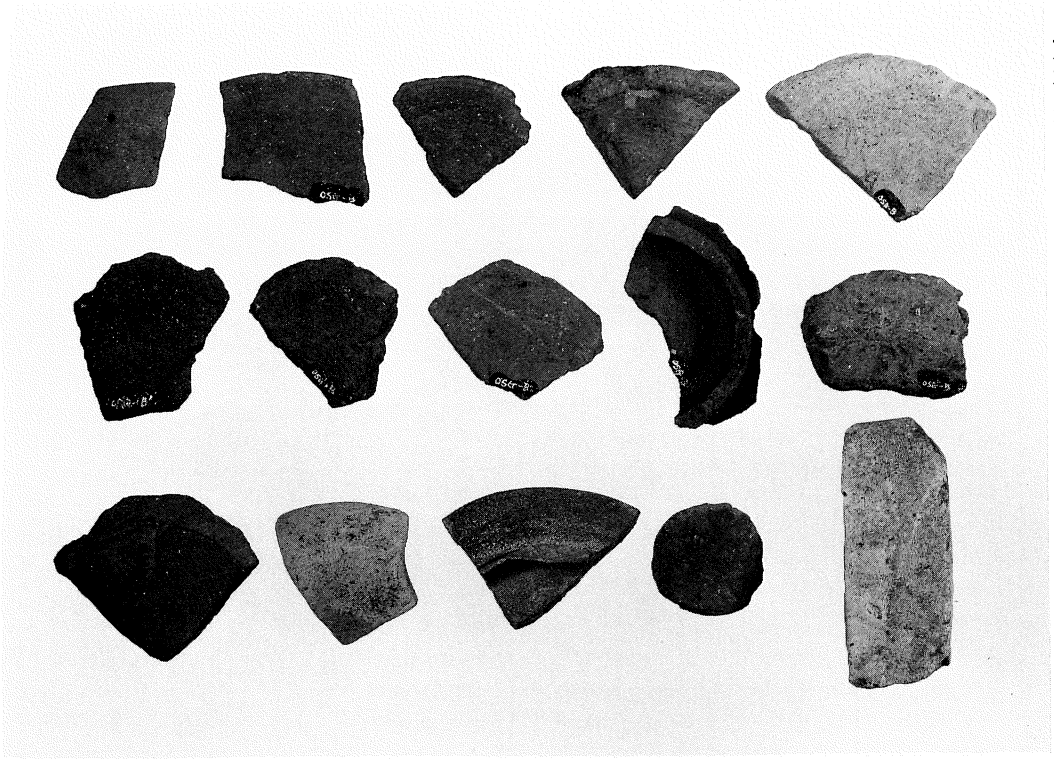
図 版 4

大杉遺跡

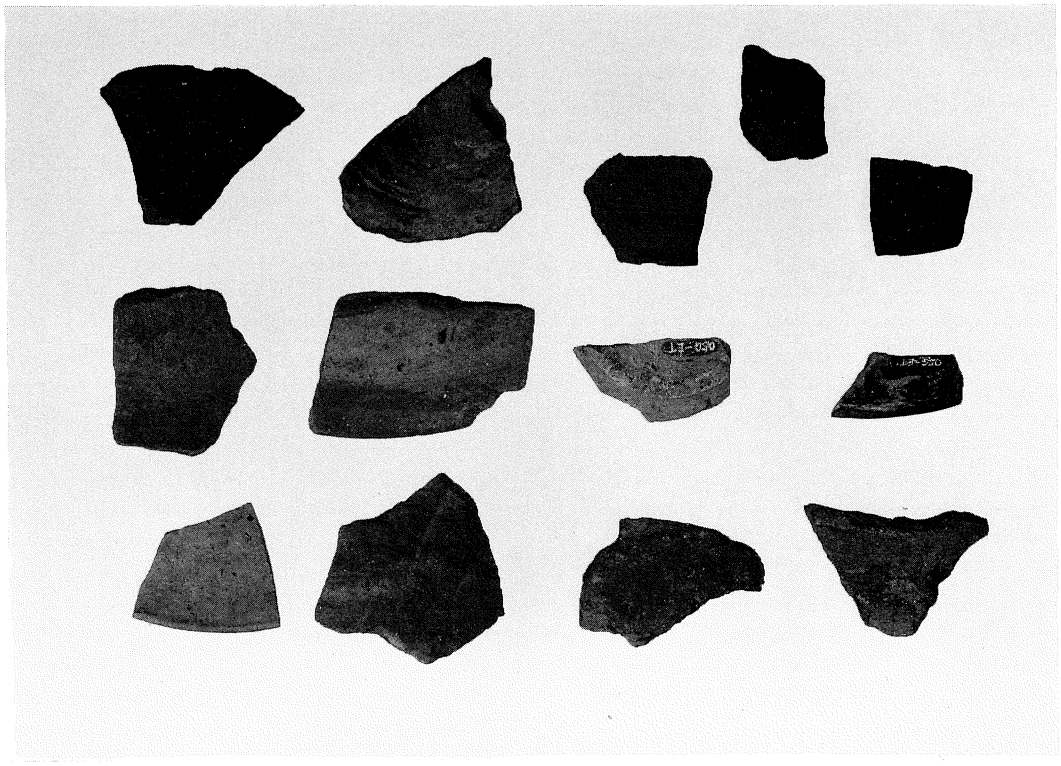
Ｆ区全景



Ｆ区全景



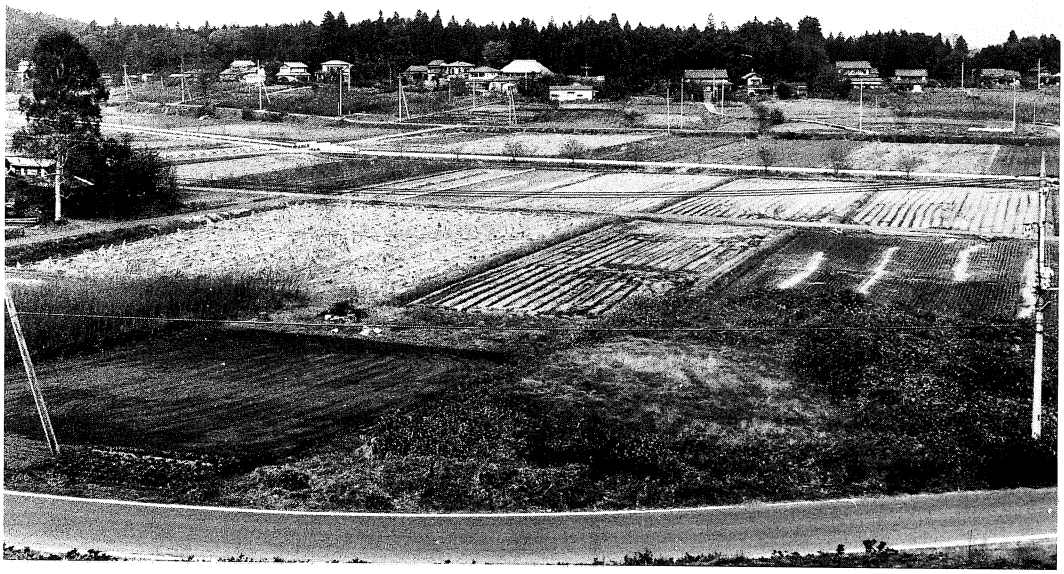
B区出土遺物



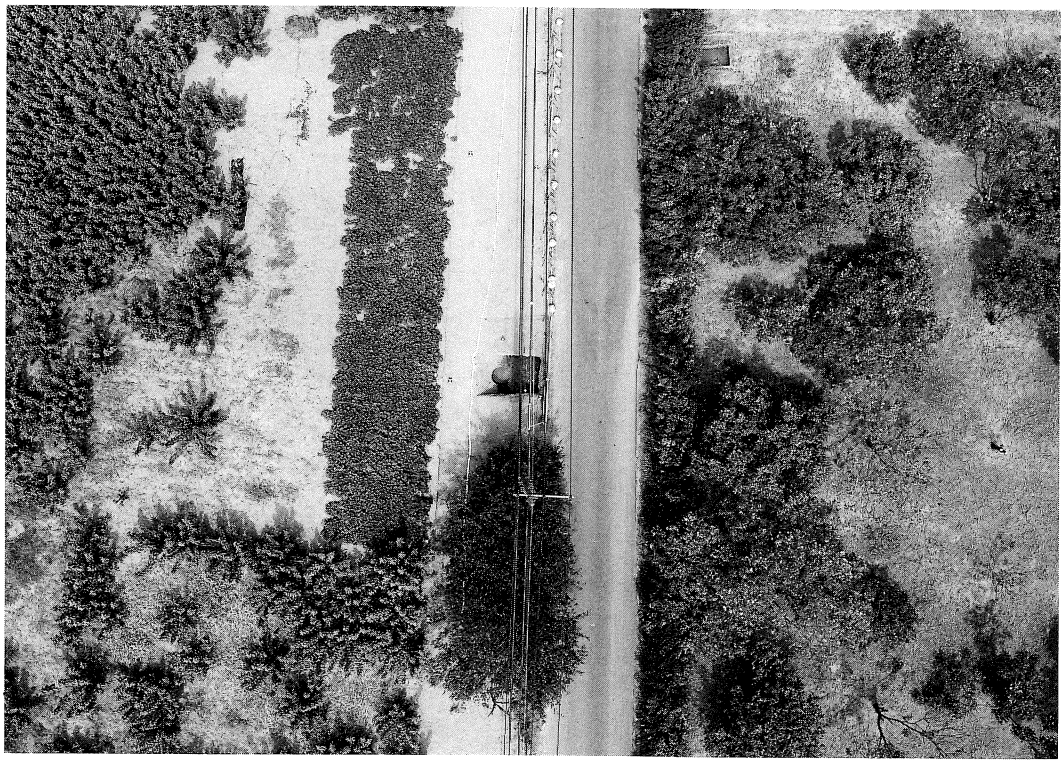
F区出土遺物

図 版 6

岡原遺跡

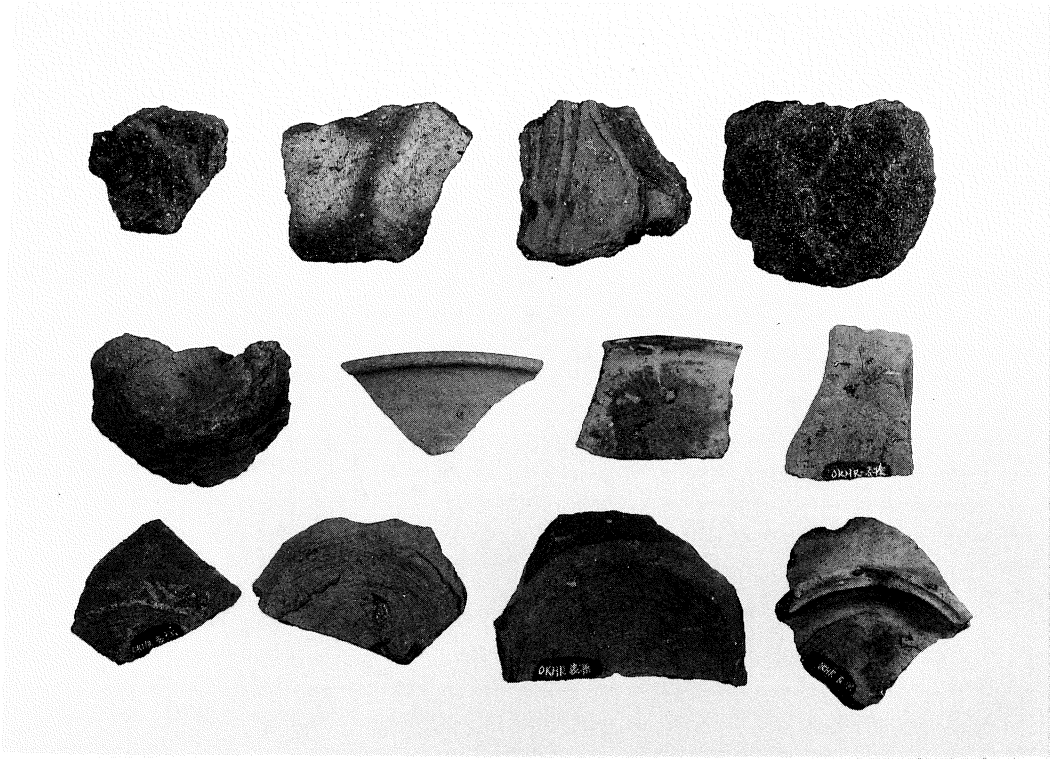


遺跡遠景



A区全景

B区完掘状態



出土遺物

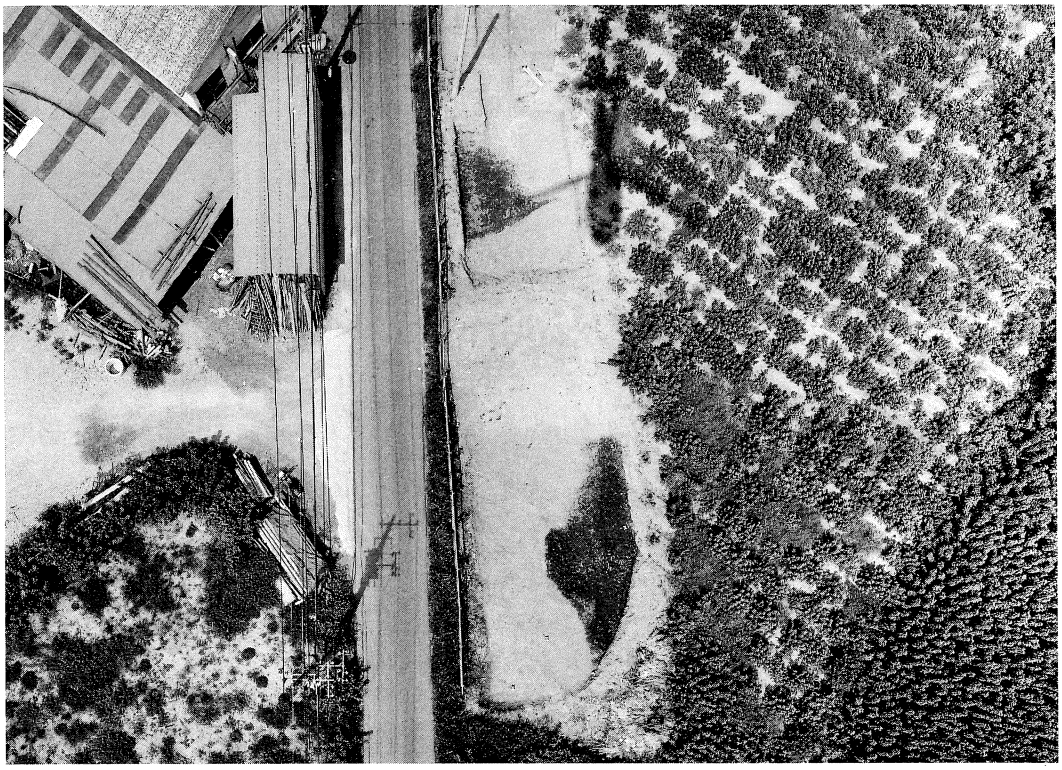
図版 8

蟹山遺跡

遺跡遠景

遺跡近景

蟹山遺跡



Ｆ区全景

Ｆ区出土遺物

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第114集

大杉・岡原・蟹山

県道本田小川線関係

埋蔵文化財調査報告書

平成３年11月20日　印刷

平成３年11月29日　発行

発行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木844

電話(0493)39-3955

FAX(0493)39-3576

印刷　株式会社　秀　飯　舎